

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集

八木沢駒込Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

2011

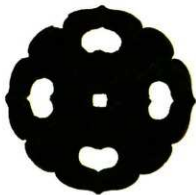
国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

八木沢駒込Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査



和鏡「秋草飛鳥鏡」



飾金具「総角付銀座」表_裏

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に関連して、平成19年度から平成21年度の3か年にわたり発掘調査された宮古市駒込Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八木沢駒込Ⅱ遺跡では、縄文時代中期の堅穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構などが検出され、当時の場の使い分けを知ることができる貴重な資料を得ることができました。また、12世紀の和鏡や簡金具などが出土し、当地における12世紀の平泉藤原氏の文化の広がりを考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解と協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成23年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込40ほかにある八木沢駒込Ⅱ遺跡の発掘調査成果を取録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される八木沢駒込Ⅱ遺跡の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。
遺跡番号 L G 43-1244
遺跡略号 Y G K Ⅱ-07 (平成19年度調査)、Y G K Ⅱ-08 (平成20年度調査)、Y G K Ⅱ-09 (平成21年度調査)
- 4 発掘調査の調査面積・期間・担当者は、次のとおりである。
平成19年度 1,900㎡/平成19年10月30日～12月5日/阿部勝則・八重畑ちか子
平成20年度 2,800㎡/平成20年11月4日～11月27日/阿部勝則・菅野 梢
平成21年度 3,600㎡/平成21年5月25日～7月3日/杉沢昭太郎・菅野 梢
- 5 室内整理の期間・担当者は次のとおりである。
平成19年度 平成20年2月1日～平成20年2月29日/阿部勝則・八重畑ちか子
平成20年度 平成21年3月2日～平成21年3月31日/阿部勝則・菅野 梢
平成21年度 平成22年1月16日～平成22年3月31日/杉沢昭太郎・菅野 梢
- 6 野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては、次の機関に委託した。
基準点測量：釜石測量設計株式会社、空中写真撮影：東邦航空株式会社
- 7 遺物の分析・鑑定にあたっては、次の機関に委託した。
石材鑑定：花崗岩研究会、炭化材樹種鑑定：岩手県木炭協会
放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所、火山灰の分析調査：パリオ・サーヴェイ株式会社
金属製品の分析・保存処理：(財)元興寺文化財研究所
金属製品(和鏡・飾金具)及び繊維質の遺物の鑑定：久保智康(京都国立博物館)
- 8 発掘・整理・報告にあたっては、次の方々にご指導・ご協力いただいた(順不同・敬称略)。
斎藤邦雄・佐藤嘉広・菅 常久 櫻井友梓(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課)、竹下將男・高橋憲太郎・鎌田祐二・加納由美・安原 誠・長谷川真・阿部 豊(宮古市教育委員会)、安達尊伸(田野畑村教育委員会)、川向聖子(山田町教育委員会)、井上雅孝(滝沢村教育委員会)、久保智康(京都国立博物館)、本澤濱輔・八重樫忠郎(平泉町)、及川 司・菅原計二(平泉町教育委員会)
- 9 本報告書の執筆は、1章調査に至る経過は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所へ原稿を依頼した。Ⅱ章～Ⅵ章は、阿部・杉沢が執筆した。報告書の編集・校正は阿部・杉沢が行った。
- 10 本遺跡の調査成果は、先に『平成19年度発掘調査報告書』(岩文振第524集)、および『平成20年度発掘調査報告書』(岩文振第546集)『平成21年度発掘調査報告書』(岩文振571集)に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 掲載図版等について

(1) 掲載図版の構成

図版構成は、遺構・遺物に分けている。遺構図版は、竪穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構・柱穴状土坑の順で種類毎に掲載した。遺物図版は土器・石器・陶磁器・金属製品・銭貨・鉄滓類・自然遺物の順に出土遺物の種類毎に図版を作成し、出土地点・層位（上→下）を基準に掲載した。別に出土地点別の遺物集成図も作成している。遺物の掲載番号は、掲載順に連番とし、図版・写真図版とも同一番号とした。掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の()内の数値は残存値である。

(2) 掲載図版の縮尺

掲載図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。

a 遺構図版

住居跡の平・断面図：1/50、炉跡の平・断面図：1/50、陥し穴状遺構・土坑の平・断面図：1/40、焼土遺構・土器埋設遺構：1/30、炭灰跡の平・断面図：1/60。

b 遺物図版

土器：1/3、土製品1/2、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、石製品：1/2、陶磁器：1/3、鉄製品：1/3。

c 写真図版

遺構の写真図版の縮尺は不定である。遺物の写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

(3) 図版の凡例

図中に使用した記号と網かけの凡例は以下のとおりである。それ以外については、個々の図版毎に凡例を示している。

〈遺 構〉



焼土

目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	3
1 遺跡の位置と立地	3
2 歴史的環境	3
3 基本層序	5
III 調査・整理の方法	7
1 野外調査	7
2 室内整理	10
IV 平成19年度調査の成果	12
1 検出遺構	12
(1) 検出遺構の概要	12
(2) 竪穴住居跡	12
(3) 土 坑	13
(4) 陥し穴状遺構	17
(5) 落ち込み	20
(6) 柱穴状土坑	21
2 出土遺物	35
(1) 出土遺物の概要	35
(2) 縄文土器	35
(3) 石 器	35
(4) 陶 磁 器	35
(5) 金 属 製 品	35
(6) 銭 貨	35
(7) 鉄 滓 類	35
(8) 炭 化 材	35
3 ま と め	40
(1) 遺 構	40
(2) 遺 物	40
(3) お わ り に	40
V 平成20年度調査の成果	41
1 検出遺構	41
(1) 検出遺構の概要	41
(2) 土 坑	41
2 出土遺物	45
(1) 出土遺物の概要	45
(2) 縄文土器	45
(3) 金 属 製 品	45

(4) 繊維質の遺物	45
3 ま と め	47
(1) 遺 構	47
(2) 遺 物	47
(3) お わ り に	47
VI 平成21年度調査の成果	
1 検 出 遺 構	49
(1) 平成21年度調査区の概要	49
(2) 土 坑	49
(3) 低 位 面	49
2 出 土 遺 物	49
3 ま と め	49
VII 分析・鑑定	53
1 放射性炭素年代測定 (平成19年度調査)	53
2 火山灰分析 (平成19年度調査)	56
3 金属製品・繊維質の遺物の成分分析 (平成20年度調査)	60
報 告 書 抄 録	89

図 版 目 次

<平成19年度調査>		第14図 SX01落ち込み	33
第1図 岩手県全図	1	第15図 柱穴状土坑	34
第2図 遺跡周辺地形分類図	2	第16図 土器	38
第3図 周辺の遺跡分布図	4	第17図 石器、陶磁器、金属製品、銭貨	39
第4図 遺構配置図 (全体図)	23	<平成20年度調査>	
第5図 遺構配置図 (部分図)	24	第18図 遺構配置図 (1)	43
第6図 SI01堅穴住居跡	25	第19図 遺構配置図 (2)、SK20土坑	44
第7図 SI02堅穴住居跡	26	第20図 土器、金属製品	46
第8図 SK01~04・09・10・12・18土坑	27	第21図 和鏡、銚金具関連資料	48
第9図 SK14・19土坑	28	<平成21年度調査>	
第10図 SK05・06陥し穴状遺構	29	第22図 出土遺物	50
第11図 SK07・08陥し穴状遺構	30	第23図 平成21年度調査区全図	51
第12図 SK11・13陥し穴状遺構	31	第24図 トレンチ断面、土坑	52
第13図 SK15~17陥し穴状遺構	32		

表 目 次

<平成19年度調査>		第12表 金属製品観察表	37
第1表 周辺遺跡一覧	6	第13表 銭貨観察表	37
第2表 竪穴住居跡観察表	22	第14表 鉄滓類観察表	37
第3表 土坑観察表	22	第15表 炭化材観察表	37
第4表 陥し穴状遺構観察表	22	<平成20年度調査>	
第5表 出土地点別土器重量表	36	第16表 トレンチ一覧表	42
第6表 遺構別出土遺物一覧表	36	第17表 土坑観察表	42
第7表 土器観察表	36	第18表 出土地点別土器重量表	42
第8表 石器観察表	37	第19表 土器観察表	46
第9表 石材略号一覧表	37	第20表 金属製品観察表	46
第10表 産地等略号一覧表	37	第21表 繊維質の遺物観察表	87
第11表 陶磁器観察表	37		

写真図版目次

<平成19年度調査>		<平成20年度調査>	
写真図版1 調査区全景	70	写真図版14 調査区全景(1)	83
写真図版2 調査区の様子	71	写真図版15 調査区全景(2)、調査前現況(1)	84
写真図版3 基本土層、トレンチ	72	写真図版16 調査区現況(2)、基本土層、SK20上坑	85
写真図版4 S I01竪穴住居跡	73	写真図版17 土器・金属製品、繊維質の物質	86
写真図版5 S I02竪穴住居跡	74	<平成21年度調査>	
写真図版6 SK01~04土坑	75	写真図版18 山頂部、斜面部	87
写真図版7 SK09・10・12・14(1)土坑	76	写真図版19 谷部ほか、出土遺物	88
写真図版8 SK14(2)・18・19土坑	77		
写真図版9 SK05~08 陥し穴状遺構	78		
写真図版10 SK11・13・15(1) 陥し穴状遺構	79		
写真図版11 SK15(2)・16・17陥し穴状遺構、SX01落ち込み	80		
写真図版12 土器	81		
写真図版13 石器、陶磁器、金属製品、鉄滓類	82		

I 調査に至る経過

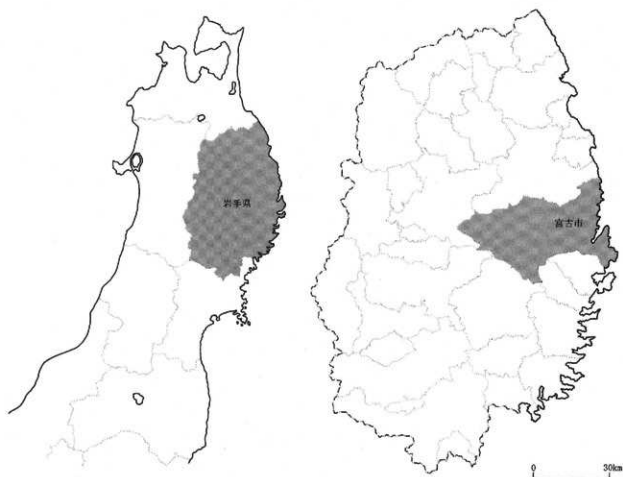
八木沢駒込Ⅱ遺跡は、一般国道45号宮古道路の工事区域内に位置しているため、当該事業の施工に伴い、発掘調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号線の線形不良及び隘路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

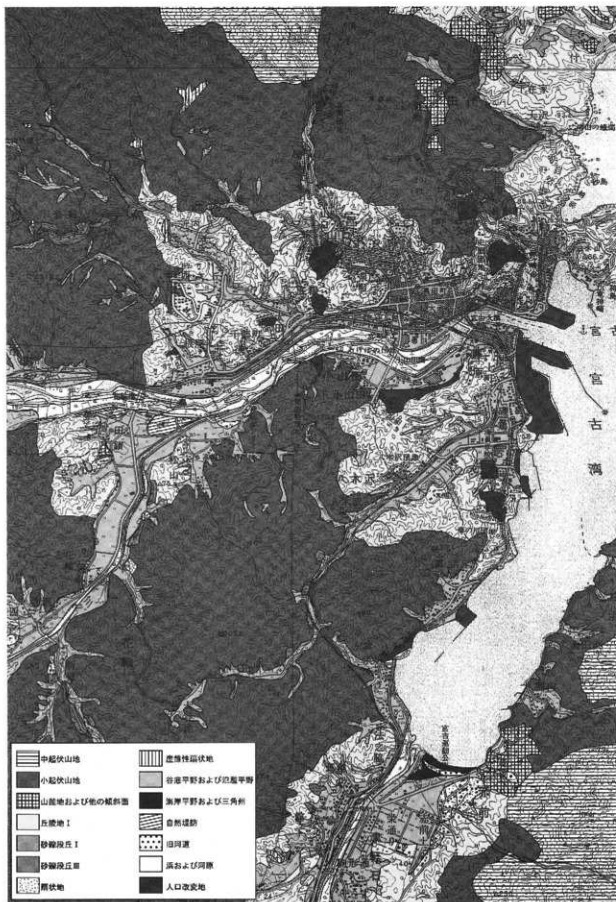
これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成17年7月15日～11月15日にわたり試掘調査を行い、平成17年12月12日付「教生第1338号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされたものである。

その結果、本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 岩手県全図



第2図 道跡周辺地形分類図

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

八木沢駒込Ⅰ遺跡は、宮古市大字八木沢第8地割字駒込40ほかに所在し、JR東日本山田線磯崎駅の南西約3.5km付近に位置する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部にかかる1,600㎡である。標高は27～33mを測る。調査前は山林および畑地である。遺跡の中央部は北緯39度36分31秒、東経141度55分55秒付近にある。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側緑辺部の一端をなしている。平成17年6月6日に行われた新設合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、それぞれ宮古市と合併し、これによって宮古市は、北西を下閉伊郡岩泉町、南方を下閉伊郡山田町と境界を接することとなった（平成20年11月1日現在、市域面積696.82km²、推計人口57,578人）。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだリアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市と川井地区の境界にあたる区界峠付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川、木道跡の南東側を流れる八木沢川がそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダムロ岩やアイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向が見られる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的に少ない標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。

2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には、多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、菅ノ沢遺跡、小沢貝塚などが確認されている。縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地はその他にも存在するが、現段階では総じて詳細な様相が把握できる状況にはない。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶏蝦夷森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認



第3図 周辺の遺跡分布図

されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隠里Ⅳ遺跡では、後期の上器が出土している。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、藁手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。八木沢駒込Ⅰ遺跡の北東2kmに位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隠里Ⅲ遺跡では平安時代の堅穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち堅穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では出土事例の稀な灰釉陶器片が出土している。

中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防衛的施設を有し、おもに閉伊氏・戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。遺跡の周辺域では、松山館、千徳城、田鎖館、花輪館、鶴沢館が確認されている。また、前代から引き継ぎ、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鋳物師関連も確認されている。

地域的・歴史的特性

以上のように、八木沢駒込Ⅱ遺跡周辺には、縄文時代～中近世に至るまでの遺跡が数多く確認、調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地的特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残像状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

3 基本層序

層序決定に際しては調査区内で層序の良好な場所を選んで基本層序の記録をとった。

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	類別
1	真田Ⅱ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
2	真田Ⅰ	平安	集落跡
3	藤岡中宮遺	縄文・古代	集落跡
4	八木沢古館	中世	城跡跡
5	織尾尾山	縄文～近世	集落跡・城跡跡・小川遺跡
6	高尾	縄文	土境遺跡
7	木沢	縄文	集落跡
8	安ノ沢	縄文・古代	集落跡
9	近内 ¹ 村	縄文・弥生・古代	集落跡
10	藤ノ沢Ⅰ	縄文・古代	集落跡
11	近内山石Ⅰ	古代以降	城跡跡
12	近内大堀	中世	城跡跡
13	赤穂	縄文・古世	集落跡
14	山口物込Ⅰ	縄文・古世	集落跡
15	山口物込Ⅱ	古代以降	集落跡
16	葛塚	縄文・古世・平安	集落跡
17	山口前	縄文・古代・中世	城跡跡・集落跡
18	打田跡	縄文	集落跡
19	原森町Ⅰ	古世	原遺跡・焼跡有田作跡
20	小沢屋敷	縄文	貝塚
21	佐原	縄文	集落跡
22	平松Ⅰ	縄文	集落跡
23	地野町	中世	倉庫跡
24	岡・崎野山貝塚	縄文～中世	貝塚・集落跡・城跡跡
25	井戸・岡	縄文	集落跡
26	田跡跡	中世	城跡跡
27	黒田館	中世	城跡跡
28	下大谷地Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
29	千穂城	縄文・平安・中世	城跡跡・野跡跡
30	寶笠Ⅰ	縄文・平安	集落跡・野跡跡
31	寶笠Ⅱ	弥生・平安	集落跡
32	長瀬Ⅰ	弥生～中世	野跡跡
33	宗町貝塚Ⅱ	縄文・奈良・平安	貝塚跡
34	磯崎Ⅰ	古代	集落跡
35	志留館	中世	城跡跡
36	納山	古代	集落跡・貝塚
37	木戸井内Ⅱ	古代以降	生産遺跡
38	木戸井内Ⅲ	弥生・古代以降	生産遺跡
39	木戸井内Ⅳ	縄文・古代・近世	集落跡・生産遺跡
40	小山田前	中世	城跡跡・野跡跡
41	松山館	古代・中世	城跡跡

No.	遺跡名	時代	類別
42	松山大地原沢	古代	集落跡
43	藤原Ⅰ	縄文・古代	集落跡
44	藤原Ⅱ	縄文・古代	集落跡
45	松原Ⅱ	縄文・古代	集落跡
46	松原Ⅲ	縄文・弥生・古代	集落跡
47	磯崎有田Ⅰ	平安	集落跡
48	磯崎有田Ⅱ	奈良	集落跡
49	光原池	縄文	集落跡・貝塚
50	小沢田	縄文・古代	貝塚
51	早坂	縄文・弥生・古代	貝塚
52	土村貝塚	縄文～平安	集落跡・貝塚
53	磯崎南天倉貝塚	縄文・古代	貝塚
54	弘石Ⅱ	縄文・平安	集落跡
55	花巻館	中世	城跡跡
56	下所塚Ⅰ	中世	城跡跡
57	八木沢Ⅱ	縄文・古代・中世	集落跡
58	八木沢Ⅲ	古代以降	生産遺跡
59	八木沢前館	中世・近世	城跡跡
60	神代池	中世	城跡跡
61	八木沢物込Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
62	金典館	中世	城跡跡
63	金典Ⅰ	縄文	散布地
64	金典Ⅱ	古代	散布地
65	金典Ⅲ	縄文・古代	散布地
66	金典Ⅳ	縄文	散布地
67	金典Ⅴ	縄文	散布地
68	金典Ⅵ・Ⅶ	古代以降	城跡跡
69	高尾Ⅱ	古代	集落跡
70	山崎館	中世	城跡跡
71	沼原	縄文・奈良	集落跡
72	沼原館	中世	城跡跡
73	小畑内Ⅰ	縄文・弥生・奈良	集落跡
74	赤坂Ⅱ	縄文・平安	集落跡
75	赤坂Ⅲ・八牧田	縄文・平安	集落跡
76	赤坂館	中世	城跡跡
77	納山貝塚	縄文	集落跡・貝塚
78	八木沢物込Ⅱ	縄文・古代	集落跡
79	八木沢野志	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
80	野の神	弥生・古代	生産遺跡
81	野の神Ⅰ	縄文・古代	生産遺跡
82	野の神Ⅱ	縄文・古代	生産遺跡

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区別にあたっては、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにして、最終的な調査区全体にメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

①平成19年度調査

基準点1	X = -43100.000	Y = 94260.000	H = 37.466m
基準点2	X = -43100.000	Y = 94288.000	H = 36.715m
補点1	X = -43120.000	Y = 94260.000	H = 38.881m
補点2	X = -43120.000	Y = 94276.000	H = 37.745m
補点3	X = -43140.000	Y = 94260.000	H = 47.167m
補点4	X = -43140.000	Y = 94276.000	H = 50.846m

②平成20年度調査

基準点1	X = -43220.000	Y = 94244.000	H = 64.767m
基準点2	X = -43236.000	Y = 94244.000	H = 63.466m
補点1	X = -43248.000	Y = 94264.000	H = 57.707m
補点2	X = -43272.000	Y = 94264.000	H = 52.044m
補点3	X = -43248.000	Y = 94280.000	H = 52.627m
補点4	X = -43276.000	Y = 94280.000	H = 51.437m

③平成21年度調査

基準点1	X = -43215.000	Y = 94250.000	H = 63.868m
基準点2	X = -43150.000	Y = 94260.000	H = 49.703m

この基準点と補点を基準としてグリッドを設定した。原点（X = -43060.000、Y = 94220.000）を北西隅にして40m四方の大グリッドを設定し、さらに4m四方の小グリッドを設定した。グリッド名は、大グリッドは北から南に向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ（ローマ数字）…、西から東に向かってA・B・C（アルファベット大文字）…とし、小グリッドは北から南に向かって1・2・3（アラビア数字）…、西から東に向かってa・b・c（アルファベット小文字）…とした。それぞれの組み合わせでⅠA1a・ⅠB1bグリッドの区画名を付し、区画左上の杭で、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、検出順にそれぞれ番号を付けて、SⅠ01・SK02のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したもや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。本調査で使用した遺構略号と遺構名は以下に記したとおりである。

SⅠ：竪穴住居跡、SK：陥し穴状遺構・土坑、SX：その他

報告にあたっては、現場で命名した遺構名をそのまま使用しているため一部欠番を生じている。

検出された遺構種別・検出数・遺構名は以下に記したとおりである。

①平成19年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

竪穴住居跡2棟：S I 01・02

土坑10基：S K 01・02・03・04・09・10・12・14・18・19

陥し穴状遺構9基：S K 05・06・07・08・11・13・15・16・17

その他1箇所：S X 01

柱穴状土坑25基：P P 1～25

②平成20年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

土坑1基：S K 20

③平成21年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

土坑1基：S K 21

(3) 試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅1～2m、長さ5～10mのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。試掘溝の設定にあたっては、平成17年度の試掘調査の成果を考慮しながら、試掘溝を入れた。試掘の結果、急斜面地で遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断された区域は、試掘調査のみで調査を終え、それ以外の区域においては、試掘にもとづいて表土掘削を行った。調査区全体の表土の厚さは20～30cmで、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。遺構検出は人力で行った。遺構検出は、尾根上はⅢ層黄褐色土層（一次検出）またはⅣ層マサ土層（二次検出）で行い、谷部ではⅡ層黒褐色土層（一次検出）またはⅢ層黄褐色土層（二次検出）で行った。

(4) 精査

検出された遺構は、原則として住居跡など大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。陥し穴の底面で確認された副穴は、径が小さく深いことから、トレンチを設定して断面観察による記録を優先して作成した。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Cardを使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

(5) 実測・写真撮影

平面実測はグリッドの基準線に合わせた1mメッシュを基準として行った。平面図・断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類は1/20を基本として、マイラー用紙に記録した。レベルは、基準高をもとに絶対高で測った。なお、トレンチ位置図・個々の遺構平面図については、グリッド杭・水糸によって設けられた基準から計測する簡易遺り方測量ではなく、電子平板を用いて図化作業を行った。断面実測については、任意の高さを基に設定した水糸を基準として計測を行った。

写真撮影は、35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台、補助用としてデジタルカメラ1台を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。また調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行った。

(6) 上層注記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』(1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著)をもとに行っているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の5段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字(I・II・III)、遺構内覆土をアラビア数字(1・2・3)で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、I a・I b・I c…などと表わした。

(7) 土壌水洗

縄文時代の住居跡・炉跡では、動物遺存体が存在する可能性、古代の住居跡やが跡では、製鉄関連の遺構である可能性を考慮し、住居跡の覆土下位(床土3cm)の覆土、住居跡の炉跡の覆土及び焼土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩(5mm・3mm・1mm)による仕分け、磁着作業を行った。この工程を経て得られた遺物には、土器・石器の細片や鉄滓類・砂鉄などがある。

(8) 調査の経過

①平成19年度調査

調査期間は平成19年10月30日～12月5日で、作業実働日数は25日であった。作業員の登録人数は28人で、一日の平均稼働作業員数は26人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

- 10月30日(火) 調査開始、作業員登録28人
- 11月13日(火) 基準点測量(釜石測量設計株式会社)
- 11月27日(火) 航空写真撮影(東邦航空)
- 11月28日(水) 終了確認。
- 12月5日(水) 調査終了・撤収

具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、平成17年度に試掘調査が行われた14,370㎡より本調査対象範囲として示された8,300㎡の内、北側1,900㎡を対象として第1次調査を行った。

調査区の現況は山林で、木は伐採されていたが、木を積み出す際に旧地形を造成して設けられた作業道が、調査区を縦断していた。作業は、調査区の確認を行った後、人力で雑物撤去を行った。集積した雑物は、後に重機で調査区域外に搬出した。その後、任意にトレンチを設けて試掘調査を行った。

調査区は南側尾根部と北側谷部に分かれる。北側谷部は、重機により表土を掘削し、遺構検出、精査を行った。尾根部は試掘調査を行い、遺構が確認された部分について拡張して調査を行った。

遺跡の公開は、11月から12月上旬の降雪・積雪時における調査であったために行わなかった。

②平成20年度調査

調査期間は平成20年11月4日～11月27日で、作業実働日数は17日であった。作業員の登録人数は21人で、一日の平均稼働作業員数は19人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

- 11月4日(火) 調査開始、作業員登録21人

11月12日（水）基準点測量（釜石測量設計株式会社）

11月21日（金）航空写真撮影（東邦航空）

11月25日（火）終了確認。

11月27日（木）調査終了、撤収

具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、1次調査に引き続いて行われた第2次調査で、南側2,800㎡を対象として行われた。

調査区の現況は山林で、木は伐採されていたが、木を積み出す際に旧地形を造成して設けられた作業道が調査区を縦断していた。作業は、調査区の確認を行った後、人力で雑物撤去を行った。集積した雑物は、後に重機で調査区域外に搬出した。その後、任意にトレンチを設けて試掘調査を行った。

調査区は西側尾根部と東側谷部に分かれる。平坦面が顕著でないことから、平成17年の試掘調査の結果を参考として試掘調査を行い、遺構が確認された箇所について拡張して調査を行う方針を進めた。遺跡の公開は、11月の降雪・積雪時の調査であったために行わなかった。

③平成21年度調査

調査期間は平成21年5月25日～7月3日である。調査区は遺跡の中で最も標高の高い山頂部、そこから広がる斜面部、斜面を下りたところ広がる低位面からなる。樹木伐採後、重機による雑物除去、人力による表土除去、遺構検出、遺構精査・実測を行っている。

2 室内整理

平成19年度調査の室内整理の期間は、平成20年2月1日～平成20年2月29日、延べ20日、整理に従事した作業員は1名である。平成20年度調査の室内整理の期間は、平成21年3月2日～平成21年3月31日、延べ21日である。整理作業は調査員が行った。平成21年度調査の整理期間は平成22年1月16日～平成22年3月31日である。それぞれ各年度の調査で得られた遺物・実測図・写真などについて整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

(1) 遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、第2原図を作成してトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、当センターの様式に基づき現場で入手した情報をそのまま保存することとし、打ち出したデータは、手実測で記録したその他の実測図と合わせて、マイラー用紙に第2原図を作成している。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。デジタルカメラで撮影したものは当センターの様式に基づきRAWデータで収納した。

(2) 遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺物Noを全破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物はグリッドごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師1名が行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するための資料とした。

a 土器

はじめに出土地点別に重量計測を行った。土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、原則としては計測値（器高・口径・底径）1箇所以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化した。破片資料は、優先的に口縁部破片を選択したが、一部胴部破片も選んでいる。そして、該当する土器の時期や型式名など記録して数的処理を行った。

b 石器

石器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物を優先して図化することにし、それ以外の石器は、観察表・写真を掲載するに留めた。

c 陶磁器

陶磁器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物及び19世紀代の資料である。

d 金属製品

金属製品は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点の観察表・図・写真を掲載した。和鏡と鉤金具については、外部に成分分析・保存処理を委託した。

e 自然遺物

炭化材がある。炭化材は、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行った。炭化材は、観察表のみの掲載とし、樹種名を掲載するに留めた。なお、外部の専門家による樹種同定を行った。

IV 平成19年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 検出遺構の概要

平成19年度調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、土坑10基、陥し穴状遺構9基、柱穴状土坑25個、落ち込み1箇所である。

遺構の占地は、縄文時代の竪穴住居跡や大形の土坑類は尾根上に占地し、その他の土坑と陥し穴状遺構は、尾根北側に広がる沢沿いの平坦部に占地している。遺構の種類によって占地が異なる。

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は尾根上から2棟確認された。検出された2棟は、いずれも円形基調で石囲炉を伴うなど形状が類似している。遺構の形状と出土遺物から縄文時代中期の住居跡と考えられる。各住居跡の特徴については、第2表を参照されたい。

S I 01竪穴住居跡

遺構（第6図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕ⅡB10c～ⅢB1cグリッド。旧試掘トレンチNo59の竪穴住居跡（古代）「北側の尾根部ではカマドを伴う竪穴住居跡1棟を確認した」とされていた部分を掘り下げて確認したところ、石囲炉が確認されたため、バルトを設定して精査を進めた。その結果、Ⅳ層で黒色土の広がり、壁・床などが確認できたことから、縄文時代の竪穴住居跡の存在を想定して調査を進めた。

〔重複関係〕東側でSK14・19土坑と重複する。SK14土坑の覆土がS I 01竪穴住居跡の覆土を切っていたため、S I 01竪穴住居跡はSK14土坑に切られている。また、SK19土坑を掘り込んでPP13がつくられていたことから、S I 01竪穴住居跡がSK19土坑を切っている。これらの遺構の新旧関係は、SK19土坑→S I 01竪穴住居跡→SK14土坑である。

〔規模・平面形〕東側は斜面下になるため壁・床が消失している。住居跡全体の西側半分の検出となった。正確な規模・形状は不明である。残存している部分の規模は、(4.51)×3.49mで、平面形は円形基調と推定される。

〔覆土・堆積状況〕黒色土と褐色土で構成される。自然堆積と考えられる。

〔壁・床面〕壁・床は、Ⅳ層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は最大61.5cmである。床はほぼ平坦だが、石囲炉より東側の床は残存していない。

〔柱穴・配置〕PP1～13の13個を確認した。PP1・2・5・13は主柱穴になる可能性がある。

〔炉〕石囲炉が1基確認されている。炉の位置は、住居跡全体のなかで東寄りに位置している可能性がある。炉の規模・平面形は、径70×66cmの方形基調の石囲炉で、周囲を一回り大きく掘り込んでから石組をしている。北側部分に炉石を構成する礫は確認できていない。使用されている石材は、花崗閃緑岩が主体で、凝灰岩（北上山地産・中生代三疊紀～ジュラ紀）も用いられている。石囲炉内には被熱痕がある。焼土の厚さは明瞭ではなく、石囲炉の一部のⅣ層がわずかに被熱している程度である。

遺物（第16・17図、写真図版12・13）

〔出土状況〕覆土から縄文土器片（28.9g）と石器が出土している。

[土器] 土器片(1・2)。

[石器] 石匙(23)。

時期 出土した遺物と遺構の形状から、縄文時代中期と考えられる。

S I 02 竪穴住居跡

遺構(第7図、写真図版5)

[位置・検出状況] III B1 b グリッド。S I 01 竪穴住居跡の西側を試掘調査中に縄文土器が出土し、精査を続けたところ石囲炉を確認し、住居跡の存在を想定して調査を進めた。検出面はIV層である。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 東側が斜面下になるため壁・床は消失している。住居跡の北東隅約半分程度を検出した状態である。そのため正確な規模・形状は不明だが、残存している部分は(3.54)×(3.14)m、平面形は円形基調と推測される。

[覆土・堆積状況] 褐色土・明黄褐色土・黄褐色土で構成される。自然堆積と考えられる。

[壁・床面] 壁・床は、IV層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は最大44.7cmである。床はほぼ平坦だが、石囲炉より東側と南側の壁・床は残存していない。

[柱穴・配線] P P 1～7の7個を確認した。炉跡を挟んで対称的な位置にあるP P 1・7・3・5は、主柱穴である可能性がある。

[炉] 石囲炉が1基確認されている。炉の位置は、住居跡の形状のなかで北寄りに位置する。炉の規模・平面形は、径67×60cmの方形基調で、石材は花崗閃緑岩や砂岩(北上山地産・中生代三畳紀～ジュラ紀)が用いられている。焼土の厚さは明瞭ではなく、石組内の一部でIV層がわずかに被熱している程度である。

遺物(第16・17図、写真図版12・13)

[出土状況] 覆土から土器片(234.1g)と石器が出土している。

[土器] 土器片(3・4)。

[石器] 両極石器(26)。

時期 出土した遺物と遺構の形状から、縄文時代中期と考えられる。

(3) 土 坑

用途不明のものを含む穴を一括した。10基ある。このなかには、尾根上で確認された定形的な規模・形状をもつ、貯蔵穴としての用途が想定されるS K 14・19土坑の2基を含めている。時期は、概ね縄文時代と考えられるが、出土遺物を欠く土坑の詳細な時期は不明である。S K 09・10土坑の覆土には調査時に中振火山灰と認識した火山灰が含まれていた。また、S K 01～03土坑は、調査時に中振火山灰と認識した火山灰を覆土に含むS X 01落ち込みを掘り込んでつくられていた。各土坑の特徴については第3表を参照されたい。

S K 01 土坑

遺構(第8図、写真図版6)

[位置・検出状況] II A 3 j～II B 3 a グリッド。S X 01落ち込みの覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] S X 01落ち込みを切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径93×82cm、底部径31×24cm、平面形は楕円形を呈する。深さは106cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はS X01落ち込みの覆土を掘り込んでつくられている。底面は南から北に下がっている。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K02土坑

遺構 (第8図、写真図版6)

[位置・検出状況] II B 3 a グリッド。S X01落ち込み覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] S X01落ち込みを切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径135×69cm、底部径77×47cm、平面形は楕円形を呈する。深さは45cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はS X01落ち込みの覆土を掘り込んでつくられている。底面は中央部が落ち込む形状である。覆土の状況から、1つの穴が重複していた可能性もある。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K03土坑

遺構 (第8図、写真図版6)

[位置・検出状況] II B 3 a グリッド。S X01落ち込み覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] S X01落ち込みを切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径92×58cm、底部径76×36cm、平面形は楕円形を呈する。深さは45cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はS X01覆土を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面は緩く湾曲する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K04土坑

遺構 (第8図、写真図版6)

[位置・検出状況] II B 1 e～2 e グリッド。北側は沢への落ち込みに堆積する黒色土上で、南側はIII層土で黒色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径124×103cm、底部径94×76cm、平面形は円形を呈する。深さは26

cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K 09土坑

遺構 (第8図、写真図版7)

[位置・検出状況] II A 6 j グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径101×58cm、底部径83×40cm、平面形は楕円形を呈する。深さは34cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土で構成される。1層に火山灰が含まれている。調査時には中振火山灰と認識したものであるが、分析の結果、十和Ⅲa火山灰である可能性が指摘されている(56頁)。

[壁・底面] 壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は南から北に緩く傾斜する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。覆土中の火山灰が、時期を類推する手懸かりとなる。

S K 10土坑

遺構 (第8図、写真図版7)

[位置・検出状況] II A 5 j グリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径125×89cm、底部径84×37cm、平面形は楕円形を呈する。深さは56cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土で構成される。上層に火山灰が含まれている。調査時には中振火山灰と認識したものである。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。覆土中の火山灰が、時期を類推する手懸かりとなる。

S K 12土坑

遺構 (第8図、写真図版7)

[位置・検出状況] I B 9 e グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径123×54cm、底部径86×25cm、平面形は楕円形を呈する。深さは54cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K 14土坑

遺構 (第9図、写真図版7・8)

[位置・検出状況] ⅡB10b・ⅢB1cグリッド。Ⅳ層で褐色土の広がりとして検出した。S I 01竪穴住居跡の西側の壁を精査していたところ、竪穴住居跡に重複する土坑として確認した。

[重複関係] S I 01竪穴住居跡・S K 19土坑と重複する。S K 14土坑の覆土がS I 01竪穴住居跡の覆土を切っていたことから、S K 14土坑が新しい。また、平面形状からS K 14土坑がS K 19土坑を切っている。これらの遺構の新旧関係は、S K 19土坑 → S I 01竪穴住居跡 → S K 14土坑である。

[規模・平面形] 規模は、開口部径182×156cm、底部径153×128cm、平面形は円形基調である。深さは207cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は内湾しながら立ち上がる。断面形はフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 遺構の重複関係から縄文時代中期と考えられる。

S K 18土坑

遺構 (第8図、写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡB4eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径107×97cm、底部径72×57cm、平面形は楕円形である。深さは92cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ真直ぐに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第16図、写真図版12)

[出土状況] 覆土下位から縄文土器片(44.1g)が出土している。

[土器] 縄文土器(5)

時期 出土遺物から縄文時代と推測される。

S K 19土坑

遺構 (第9図・写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡB10cグリッド。S I 01竪穴住居跡の精査中に床面(Ⅳ層)で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] S I 01堅穴住居跡・SK14土坑と重複する。SK14土坑の平面形がSK19土坑の平面形を切っていたことから、SK19土坑はSK14土坑に切られている。また、S I 01堅穴住居跡-PP13がSK19土坑の覆土を掘り込んでつくられていたことから、SK19土坑はS I 01堅穴住居跡に切られている。これらの遺構の新旧関係は、SK19土坑 → S I 01堅穴住居跡 → SK14土坑である。

[規模・平面形] 規模は、開口部径(121)×104cm、底部径103×84cm、平面形は円形基調である。深さは128cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・明黄褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はIV層を掘り込んでつくられている。壁は内湾しながら立ち上がる。断面形は裾が広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。SK19土坑とK14土坑の重複する底部には、礫が置かれていた。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第16図、写真図版12)

[出土状況] 覆土から縄文土器片(248.8g)が出土している。

[土器] 縄文土器(6~9)。

時期 出土遺物と遺構の重複関係から縄文時代中期と推測される。出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、4160±30yrBPの結果が得られている(56頁)。

(4) 陥し穴状遺構

形状から、陥し穴としての機能が考えられる穴である。調査区北側の平坦面から9基確認された。平面形は、楕円形、溝状などの形状を呈するものがある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、縄文時代と推測される。各陥し穴状遺構の特徴については、第4表を参照されたい。

SK05陥し穴状遺構

遺構 (第10図、写真図版9)

[位置・検出状況] I I 10b・10cグリッド。III層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径170×86cm、底部径108×20cm、平面形は長軸の長い楕円形を呈する。南側の張り出しは掘りすぎたものである。深さは68cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・黒褐色土から構成される。暗褐色土層には小礫を10%含んでいる。

[壁・底面] 壁・底面はIII層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ真直ぐに立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南東側が一段高くなっている。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK06陥し穴状遺構

遺構 (第10図、写真図版9)

[位置・検出状況] II B 6 hグリッド。III層で細長い黒褐色土の広がりとして検出した。平面形状の検出面はIII層だが、断面を観察するとII層中から掘り込まれている。東側が調査区域外にかかる。

[重複関係] なし。

1 検出遺構

[規模・平面形] 規模は、開口部径(73)×35cm、底部径(65)×18cm、平面形は細長い溝状を呈するものと推定される。深さは45cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK07陥し穴状遺構

遺構(第11図、写真図版9)

[位置・検出状況] II B 6 g グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径168×74cm、底部径91×42cm、平面形は細長い楕円形を呈する。深さは63cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・褐色土・暗褐色土から構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は西から東へ傾斜している。

[その他の付属施設] 底面の中央より東寄りに副穴を1個確認した。開口部が径20cmほどある開口部の広い穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK08陥し穴状遺構

遺構(第11図、写真図版9)

[位置・検出状況] I B10 f・II B1 f グリッド。北側は沢に向かって落ち込む黒色の堆積土上、南側はⅢ層上にまたがって、黒褐色土の細長い広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、調査区北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径331×74cm、底部径312×17cm、平面形は溝状を呈する。深さは89cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黒褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は、南側から北側にかけて緩く傾斜する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 覆土から土器(7.3g)が出土している。小片のため不掲載である。

時期 出土遺物は少量であり、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK11陥し穴状遺構

遺構(第12図、写真図版10)

[位置・検出状況] II B3 b～3 c グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径439×67cm、底部径234×13cm、平面形は溝状を呈する。深さは101cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・褐色土・黄褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は中央付近が落ち込むように緩く湾曲している。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。なお、出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、5060±40yrBPの結果が得られている（53頁）。

S K 13陥し穴状遺構

遺構（第12図、写真図版10）

[位置・検出状況] Ⅱ B 5 d～5 e グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径399×63cm、底部径377×19cm、平面形は溝状を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは114cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は直線的で長軸方向の西から東にかけて緩く傾斜する。

[その他の付属施設] 底面に副穴4個を伴う。径20cm、深さ15～25cm程度の穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 15陥し穴状遺構

遺構（第13図、写真図版10・11）

[位置・検出状況] Ⅱ B 3 c～3 d グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径235×58cm、底部径208×14cm、平面形は溝状を呈する。深さは79cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] 底面に副穴を2個伴う。規模は径20cm、深さ15cmほどの穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 16陥し穴状遺構

遺構（第13図、写真図版11）

[位置・検出状況] Ⅱ B 2 c～2 d グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切って掘り込まれている。

1 検出遺構

[規模・平面形] 規模は、開口部径230×54cm、底部径197×28cm、平面形は溝状を呈する。深さは59cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は緩く湾曲する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 17陥し穴状遺構

遺構 (第13図、写真図版11)

[位置・検出状況] II B 2 c グリッド。北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切って掘り込まれている。Ⅲ層相当で黒褐色土の広がりとして検出した。南側に落ち込みに対する試掘溝を入れており、そのため遺構の南東部を失っている。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径267×42cm、底部径218×20cm、平面形は溝状を呈する。深さは39cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は長軸方向の西から東へ緩く傾斜する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 土器片 (28.0g) が覆土中から出土しているが、小片のため不掲載である。

時期 出土した遺物は少量であり、詳細は不明だが、縄文時代と考えられる。

(5) 落ち込み

調査区北側の平坦面で、調査区域外の西側から延びる形で落ち込みが確認された。人為的な遺構とは判断していないが、黒褐色土の覆土中に火山灰を確認できたこと、落ち込みを切る遺構が確認できたこと、落ち込みに切られる遺構が想定されたこと、などから精査を行ったものである。

S X 01落ち込み

遺構 (第14図、写真図版11)

[位置・検出状況] II A 1 i ~ II B 4 a グリッド。Ⅲ層で中掘火山灰を含む暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] S K 01・02・03土坑に切られている。

[規模・平面形] 検出された範囲は、南北約15m、東西約7mで、壁の上面観は曲線的である。深さはもっとも深いところで1.5mほどである。

[覆土・堆積状況] におい黄褐色土・黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成される。におい黄褐色土は上下に細分される。調査時に中掘火山灰と認識した火山灰である。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は、やや凹凸があるが、ほぼ平坦である。調査時に湧水が確認できている。

[その他の付属施設] なし。

遺物（第16図、写真図版12）

〔出土状況〕黒色土層中から土器片（77.7g）が出土している。

〔土器〕縄文土器（14）。

時期 覆土の状態と遺物出土状況から縄文時代以降に埋没したものと推測されるが、詳細は不明である。なお、SX01落ち込みの覆土で確認された火山灰は、調査時にはSK09土坑の覆土で確認された火山灰と同一のものと認識したものである。SK09土坑覆土中の火山灰の同定結果に拠れば、所属時期が大きく異なってくる可能性はある。性格は埋没の可能性はある。

（6）柱穴状土坑

調査区北側の平坦面で、柱穴状土坑が25個確認された。分布から、ⅡB3aグリッド付近で検出された6個と、ⅡB1f～3fグリッド付近で検出された19個に大別される。建物の構成を確認できていないので、柱穴群として報告する。個々の柱穴状土坑の規模は、観察表を参照されたい。

PP1～6柱穴状土坑**遺構**（第15図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕PP1はⅢ層、PP2～6はSX01落ち込みの覆土中で検出された。

〔重複関係〕PP2～6はSX01落ち込みを切っている。

〔規模・平面形〕個々の柱穴の規模には差がある。柱穴群は径4m四方に分布する。

〔覆土・堆積状況〕黒褐色土・暗褐色土が主体である。

〔壁・底面〕壁・底面は検出面と同様にⅢ層である。

〔その他の付属施設〕なし。

遺物 PP2から土器（19.8g）が出土した。小片のため不掲載である。

時期 覆土の状態と遺物出土状況から縄文時代以降と推測される。

PP7～25柱穴状土坑**遺構**（第15図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

〔重複関係〕PP21・20は北側の沢に落ち込む堆積土を切ってつくられている。

〔規模・平面形〕個々の柱穴の規模には差がある。柱穴群は径6×12m四方に分布する。PP7・8・9・10・11が北東-南西方向で直線的に並ぶ。柱間の距離は約1.8～2m（約6尺）である。

検出された柱穴は、深さも10～27cmと浅いことから、周辺は削平されているものと推測される。すでに消滅した柱穴の存在を想定すれば、PP7～10にPP20・21を含めた建物跡の存在も想定されるのかもしれない。柱列は、建物跡を構成していた可能性もある。

〔覆土・堆積状況〕黒褐色土・暗褐色土が主体である。

〔壁・底面〕壁・底面は検出面と同様にⅢ層である。

〔その他の付属施設〕なし。

遺物（第17図、写真図版13）

〔出土状況〕PP7から銭貨が出土している。

〔銭貨〕元祐通宝（俗称：叶手元祐、初鑄年：近世前期）（42）。

時期 近世前期の銭貨が出土していることから、これらの柱穴は近世以降の可能性はある。

1 検出遺構

第2表 竪穴住居跡観察表

(数値): 残存量

図号 No	写図 No	遺構名	位置	検出地	平面形	規模(m)	壁高(cm)	壁の構造	壁の厚さ (cm)	壁の断面 (m)	柱穴 の有無	竪穴の地層状況 (上層→下層)	付属 施設	遺構関係 (旧→新)	遺 物 (図録No.)	時期	
																	開口部
6	4	SK01	II B10c, III B1c	IV	IV	円形	(1.51)×(3.49)	61.5	石積壁	70×60	IV層の 被熱のみ	13	黒色土、褐色土	なし	SK19→SK14	1・2・23	縄文 中葉
7	5	SK02	III B1b	IV	IV	円形	(3.84)×(3.14)	44.7	石積壁	67×60	IV層の 被熱のみ	7	褐色土、明黄褐色土、 黄褐色土	なし	なし	3・4・26	縄文 中葉

第3表 土坑観察表

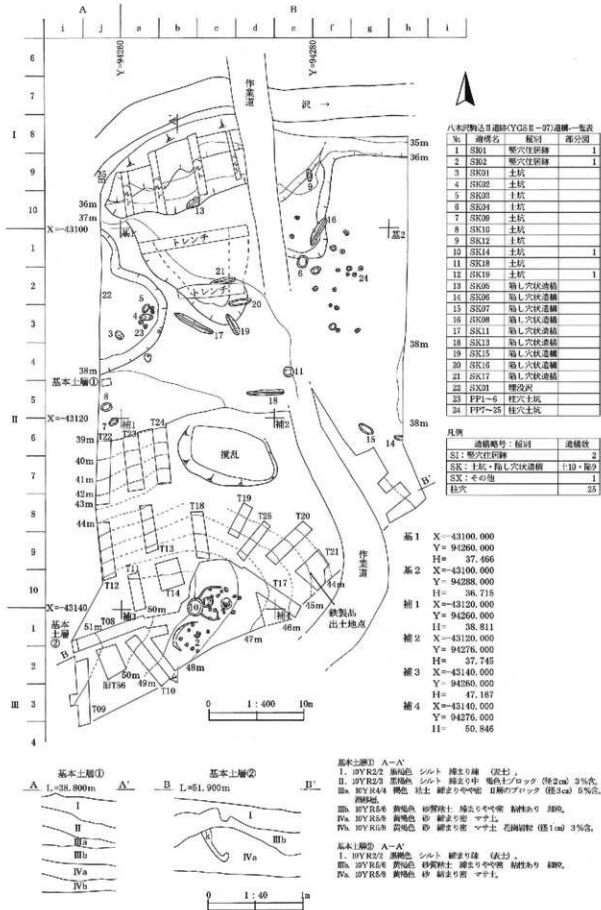
(数値): 残存量

図号 No	写図 No	遺構名	位置	検出地	平面形	規模(m)			底面の レベル (m)	覆上の地層状況	竪穴関係	付属施設	時期	
						開口部	底面	高さ						
8	6	SK01	II A3), II B3a	II	円形	93×82	51×24	106.8	36.765	黒褐色土、褐色土	SK01→SK01	土	なし	不明
8	6	SK02	II B3a	II	楕円形	135×69	77×47	45.0	37.269	黒褐色土、暗褐色土	SK01→SK02	土	なし	不明
8	6	SK03	II B3a	II	楕円形	92×56	76×36	45.3	37.253	黒褐色土	SK01→SK03	土	なし	不明
8	6	SK04	II D1e, 2e	III	円形	124×103	94×76	39.4	36.960	黒褐色土	なし	土	なし	不明
8	7	SK09	II A6)	III	楕円形	101×56	83×40	34.6	38.547	黒褐色土(火山灰含む)	なし	土	なし	不明
8	7	SK10	II A6)	III	楕円形	133×89	84×37	56.7	38.106	暗褐色土、黒褐色土(火山灰含む)	なし	土	なし	不明
8	7	SK12	I B9e	III	楕円形	113×54	86×25	54.2	35.499	黒褐色土	なし	土	なし	不明
9	7・8	SK14	II D10b, III B1c	IV	円形	182×156	133×128	207.0	47.052	褐色土、暗褐色土、黄褐色土	SK19→SK14	土	なし	縄文 中葉
9	8	SK18	II D4e	III	円形	107×97	72×51	92.4	36.177	黒褐色土、暗褐色土	なし	土	なし	不明
9	8	SK19	II B10c	IV	円形	(121)×104	103×84	128.4	47.059	暗褐色土、明黄褐色土、褐色土	SK19→SK14	土	なし	縄文 中葉

第4表 陥し穴状遺構観察表

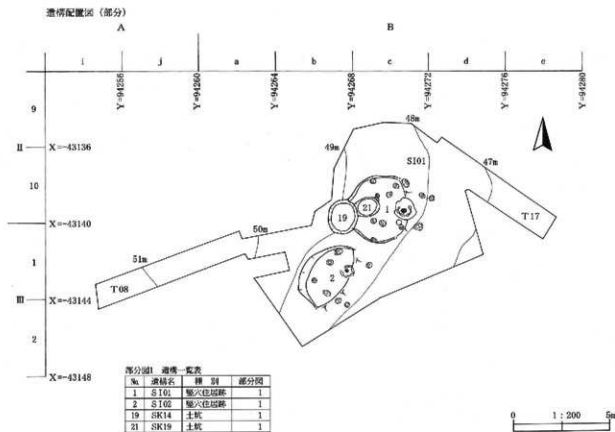
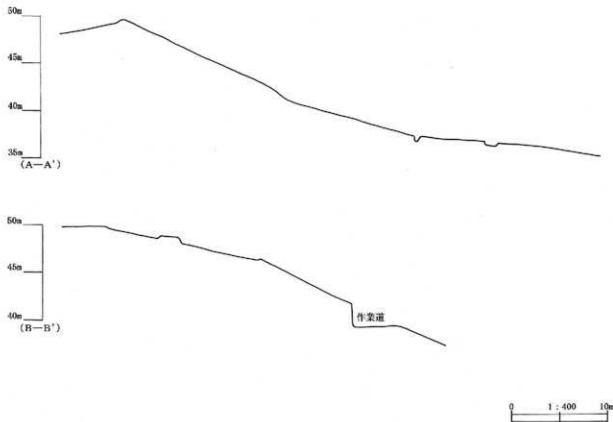
(数値): 残存量

図号 No	写図 No	遺構名	位置	検出地	平面形	規模(m)			底面の レベル (m)	覆上の地層状況	竪穴関係	付属施設	時期	
						開口部	底面	深さ						
10	9	SK05	I T10b, 10c	III	楕円形	176×86	106×50	68.1	36.030	暗褐色土、黒褐色土	なし	土	なし	縄文?
10	9	SK06	II D6b	III	溝状	(77)×35	65×18	45.0	35.616	黒褐色土、褐色土、暗褐色土	なし	土	なし	縄文?
11	9	SK07	II B6g	III	溝状	168×74	91×42	63.3	35.754	黒褐色土、褐色土、暗褐色土	なし	土	陥し穴?欄	縄文?
11	9	SK08	I B10 f, II B1 f	III	楕円形	332×174	312×117	89.1	35.904	黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土	なし	土	なし	縄文?
12	10	SK11	II B3b, 3c	III	溝状	456×67	234×13	101.1	36.600	黒褐色土、褐色土、黄褐色土	なし	土	なし	縄文?
12	10	SK13	II B54, 5e	III	溝状	399×63	377×19	114.0	36.963	黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土	なし	土	陥し穴?欄	縄文?
15	10.11	SK15	II B3c, 3d	III	溝状	235×58	208×14	79.8	36.495	黒褐色土、褐色土、黄褐色土	なし	土	陥し穴?欄	縄文?
15	11	SK16	II B2c, 2d	III	溝状	230×54	197×28	59.7	36.504	黒褐色土	なし	土	なし	縄文?
15	11	SK17	II D2c	III	溝状	267×43	218×20	39.3	36.450	土(火山灰含む)、暗褐色土	なし	土	なし	縄文?

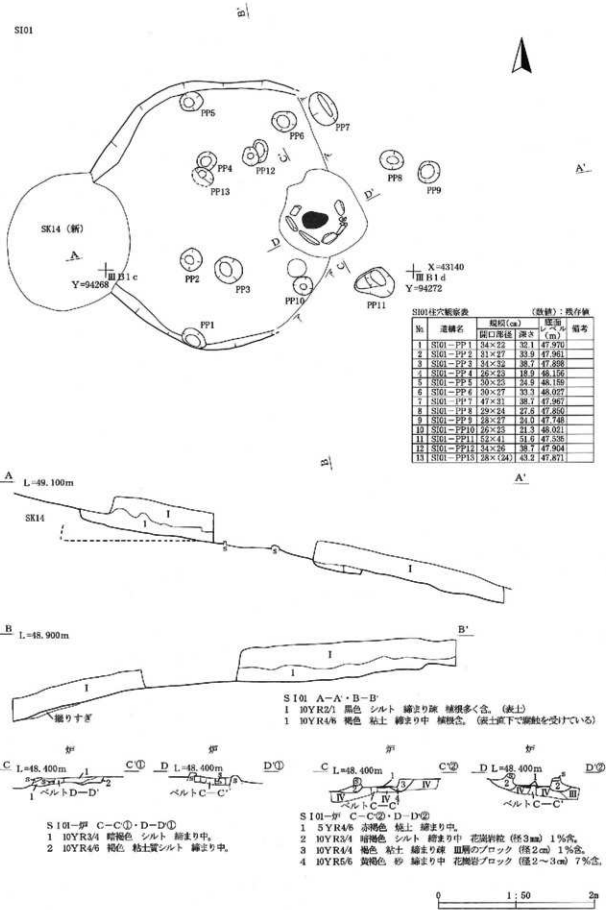


第4図 遺構配置図(全体図)

1 検出遺構



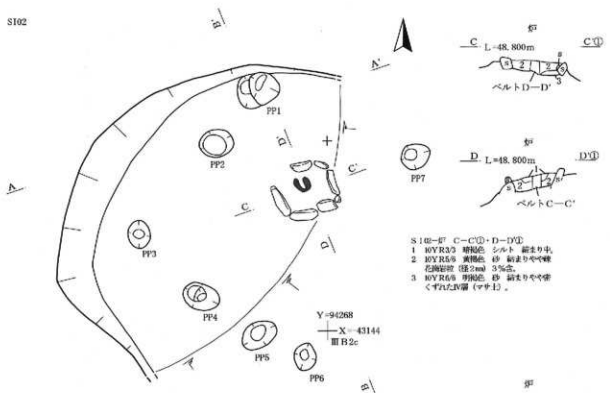
第5図 遺構配置図 (部分図)



第6図 SI01竪穴住居跡

1 検出遺構

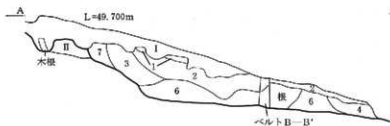
SI02



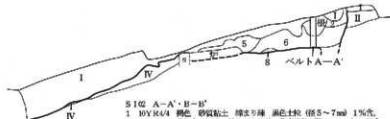
SI02柱穴数表

(数値)：残存率

No	遺構名	幅横 (cm)	底面 開口厚径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	SI02-PP1	43×35	44.4	48.249	
2	SI02-PP2	36×28	45.0	48.170	
3	SI02-PP3	29×24	30.0	48.387	
4	SI02-PP4	47×36	39.0	48.136	
5	SI02-PP5	48×34	38.0	47.910	
6	SI02-PP6	29×21	38.0	47.824	
7	SI02-PP7	34×25	34.0	47.919	

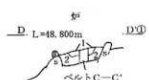
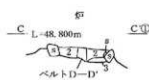


B L=49,400m



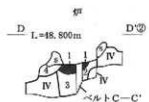
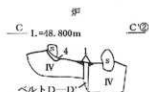
SI02 A-A'・B-B'

- 1 0YR4/4 褐色 砂質粘土 焼まり跡 褐色土粒 (径5~7mm) 1%含。
- 2 0YR5/6 黄褐色 粘土 焼まりややぐ 花崗岩粒 (径1~3mm) 3%含。
- 3 0YR3/6 黄褐色 砂 焼まりややぐ 花崗岩ブロッコ (径3~4mm) 1%含。
- 4 0YR4/4 褐色 砂質粘土 焼まり跡 花崗岩ブロッコ (径2mm) 1%含。
- 5 0YR4/4 褐色 砂質粘土 焼まりややぐ 花崗岩粒 (径2mm) 1%含。
- 6 0YR3/6 黄褐色 粘土 焼まりややぐ 花崗岩粒 (径5mm) 1%・可塑性土粒 (径7mm) 3%含。
- 7 0YR3/6 黄褐色 粘土 焼まりややぐ 花崗岩粒 (径2mm) 3%含。
- 8 0YR5/6 黄褐色 砂 焼まりややぐ 黄褐色土粒 (径5mm) 1%含。



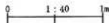
SI02-C-C'・D-D'

- 1 0YR3/6 黄褐色 シルト 焼まりややぐ
- 2 0YR5/6 黄褐色 砂 焼まりややぐ 花崗岩粒 (径5mm) 3%含。
- 3 0YR5/6 黄褐色 砂 焼まりややぐ 粘土粒 (径1mm) 3%含。

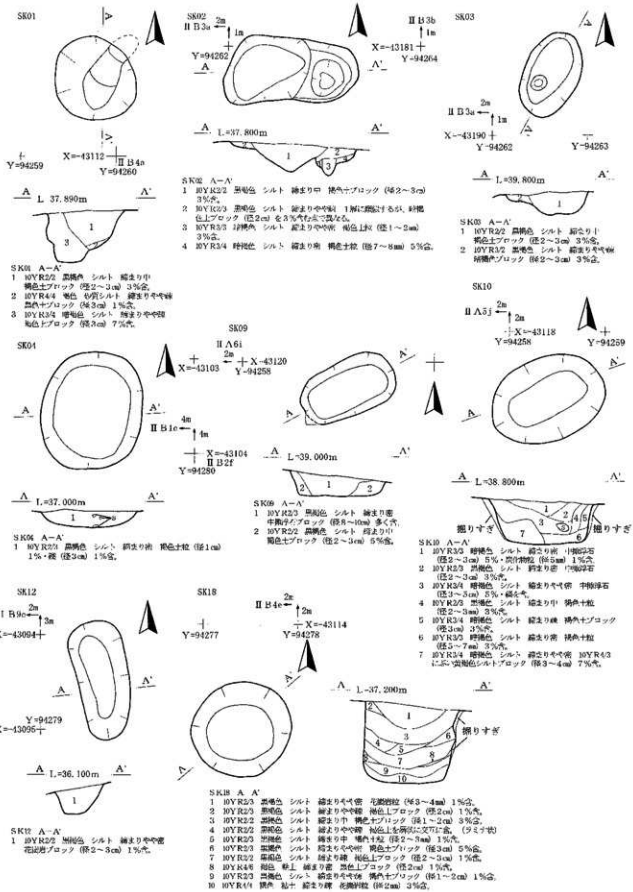


SI02-C-C'・D-D'

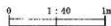
- 1 5YR4/6 赤褐色 粘土 焼まりややぐ
- 2 0YR3/4 黄褐色 シルト 焼まりややぐ
- 3 0YR4/4 褐色 シルト 焼まりややぐ
- 4 0YR3/4 黄褐色 シルト 焼まりややぐ



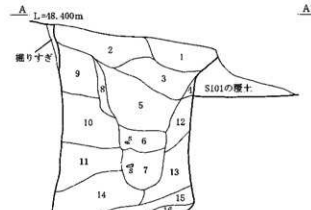
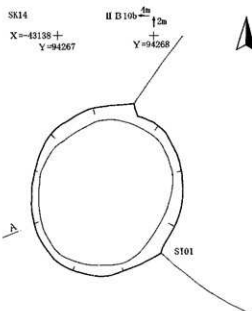
第7図 SI02竪穴住居跡



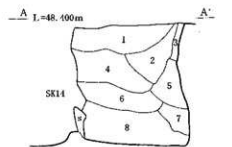
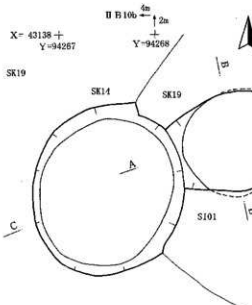
第8図 SK01~04・09・10・12・18土坑



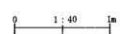
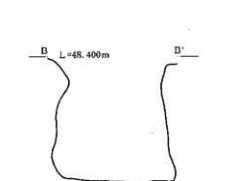
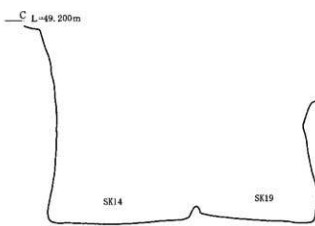
1 検出遺構



- SK14 A-A'
- 1 10YR4/4 褐色 粘土 締まり中 花崗岩粒 (径3mm) 7%含。
 - 2 10YR4/6 褐色 粘土 締まりやや硬 花崗岩粒 (径3mm) 1%含。
 - 3 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まりやや硬 褐色土ブロック (径3cm) 5%含。
 - 4 10YR5/6 灰褐色 粘土 締まり硬 花崗岩粒 (径2mm) 1%含。
 - 5 10YR3/3 暗褐色 粘土 締まりやや硬 花崗岩粒 (径3~5mm) 7%含。
 - 6 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まりやや硬 花崗岩粒 (径3~3mm) 3%含。
 - 7 10YR3/1 暗褐色 シルト 締まりやや硬 褐色土粒 (径3mm) 3%・粒 (径3~7cm) 3%含。
 - 8 10YR4/4 暗褐色 シルト 締まり中 花崗岩粒 (径3mm) 1%含。
 - 9 10YR5/6 灰褐色 粘土 締まりやや硬 暗褐色土ブロック (径3~4cm) 5%含。
 - 10 10YR6/6 灰黄褐色 砂 締まりやや硬。
 - 11 10YR6/6 灰黄褐色 砂 締まりやや硬 暗褐色土ブロック (径3~4cm) 3%含。
 - 12 10YR6/6 灰黄褐色 砂 締まり硬 花崗岩粒 (径3mm) 1%含。
 - 13 10YR5/4 にがい黄褐色 砂質シルト 締まり硬 黄褐色土ブロック (径5cm) 3%含。
 - 14 10YR5/6 灰褐色 粘土 締まりやや硬 ぐずれたマサ土ブロック (径3~4cm) 3%含。
 - 15 10YR4/1 褐色 粘土 締まり中 花崗岩粒 (径2mm) 3%含。
 - 16 10YR4/4 褐色 粘土 締まりやや硬 灰ブロック (径1cm) 1%含。

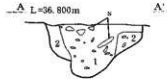
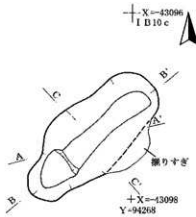


- SK19 A-A'
- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 褐色土ブロック20%・灰化物1%含。
 - 2 10YR4/1 褐色 砂質シルト 締まり中。
 - 3 10YR3/2 暗褐色 シルト 締まり中。
 - 4 10YR4/3 にがい黄褐色 砂質シルト 締まり中。
 - 5 10YR7/6 灰黄褐色 砂 締まり硬 マサ土の混入。
 - 6 10YR4/4 褐色 砂質シルト 締まり硬 マサ土5%含。
 - 7 10YR4/3 にがい黄褐色 砂 締まり硬 マサ土3%含。
 - 8 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 マサ土10%含。

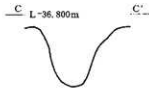


第9図 SK14・19土坑

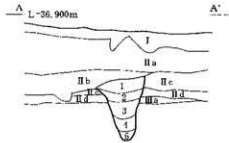
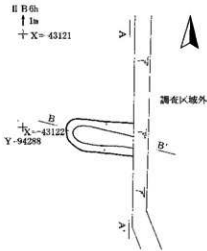
SK05



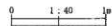
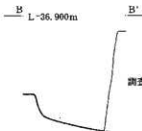
- SK05 A-A'
- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 礫 (径5~10cm) 10%・褐色土ブロック (径3cm) 1%含。
 - 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まりやや密 褐色土ブロック (径3cm) 5%含。柱状十状か、1層は一辺明かともみられる。



SK06



- SK06 A-A'
- I 表土
- II a 10YR2/3 暗褐色 締まり中 花崗片岩 (径1~3cm) 3%・白色土 (スコリア?) 7%含。
- II b 10YR2/3 暗褐色 締まりやや密 II a層に類似するが、色調やや暗く混入物の量が減る。
- II c 10YR2/3 暗褐色 締まり密 花崗片岩 (径1~3cm) 10%含。
- II d II cとII aの境上 (帯砂層)。
- III a 10YR4/6 褐色 締まり密 磨砕花崗岩 花崗片岩 (径3cm) 3%含。
- SK06 表土
- 1 10YR2/2 暗褐色 シルト 締まり疎 II b層に類似するが、暗褐色土ブロック (径3cm) 含。
 - 2 10YR2/2 暗褐色 シルト 締まりやや密 褐色土粒 (径5mm) 1%含。
 - 3 10YR2/1 暗褐色 シルト 締まり密 II c層の上に類似 褐色土ブロック (径2~3cm) を層状に含。
 - 4 10YR2/2 暗褐色 シルト 締まり疎 褐色土ブロック (径1~2cm) 1%含。
 - 5 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり疎 花崗片岩 (径5mm) 3%含。

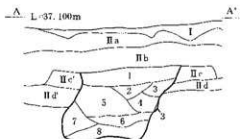
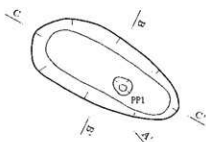


第10図 SK05・06陥し穴状遺構

I 検出遺構

SK07
Y=94284
X=43120

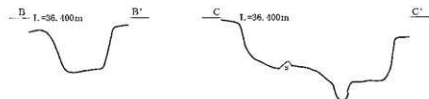
Y=94286



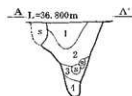
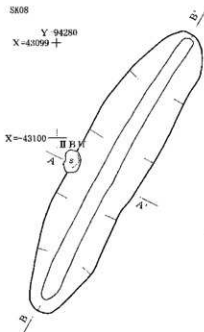
- SK07 A-A'
- I 地す
 - II a 10Y R23 黒褐色 シルト 締まり中 赤褐色砂 (厚1~3cm) 3%・白色砂 (スロリアク) 7%共
 - II b 10Y R23 黒褐色 シルト 締まり中や密 II a層に類似するが、色鮮やかで土質の軟弱傾向
 - II c 10Y R23 黒褐色 シルト 締まり中 花崗岩塊 (厚1~3cm) 10%共
 - II c' 10Y R23 黒褐色 シルト 締まり中 花崗岩塊 (厚10cm前後) 主体で黒褐色土が混じる
 - II d II cとII aの混在 (60%前後)
 - II d' 10Y R44 褐色 シルト 締まり中 ヤサシ (厚2~10cm) 10%共
- SK07 層土
- 1 10Y K27 黒褐色 シルト 締まり中や密 花崗岩塊 (厚2~3cm) 5%共
 - 2 10Y R22 褐色 シルト 締まり中や密 花崗岩塊 (厚2~3cm) 7%共
 - 3 10Y R46 褐色と10Y R22 褐色の混在 シルト 締まり中
 - 4 10Y K22 黒褐色 シルト 締まり中や密 褐色土塊 (厚2~3cm) 3%共
 - 5 10Y R23 褐色 シルト 締まり中 褐色土塊 (厚2~3cm) 3%・花崗岩塊 (厚2cm) 1%共
 - 6 10Y R21 褐色 シルト 締まり中や密 褐色土ブロック (厚1cm) 1%共
 - 7 10Y R46 褐色と10Y R22 褐色の混在 シルト 締まり中
 - 8 10Y K22 黒褐色 締まり中 褐色土ブロック (厚3~6cm) 3%共

SK-07 調査履歴表 (数値) : 残存層

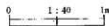
層	遺構名	埋戻(m)	見附深さ(m)	備考
I	SK07-PP1	30×17	15.5	35.628



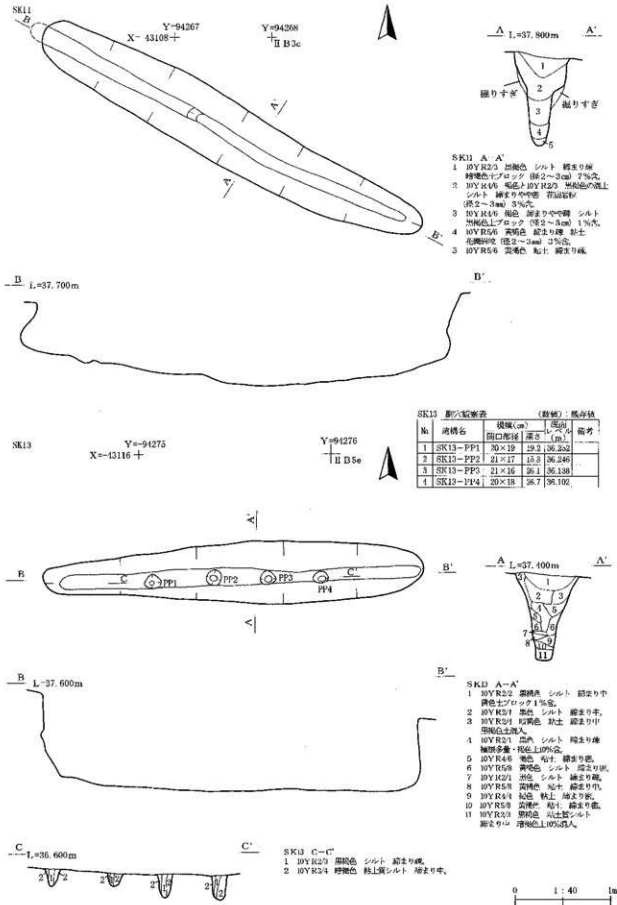
SK08
Y=94280
X=43099



- SK08 A-A'
- 1 10Y R22 褐色 シルト 締まり中 花崗岩塊 (厚2~4cm) 3%共
 - 2 10Y R23 褐色 シルト 締まり中 花崗岩ブロック (厚2cm) 1%・褐色土塊 (厚2~3cm) 1%共
 - 3 10Y R44 褐色 砂質シルト 花崗岩塊 (厚8~10cm) 5%
 - 4 10Y R23 褐色 シルト 締まり中や密 褐色土塊 (厚5~7cm) 7%共

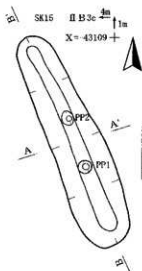


第11図 SK07・08掘り穴状遺構



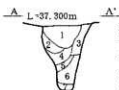
第12図 SK11・13掘り穴状遺構

1 検出遺構



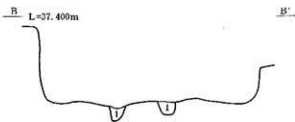
SK15 検出穴調査表 (数値) 残存壁

No	遺構名	規模(m)	深さ(m)	遺存壁(m)	備考
1	SK15-PP1	17×15	14.4	36.291	
2	SK15-PP2	19×15	18.6	36.291	

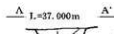
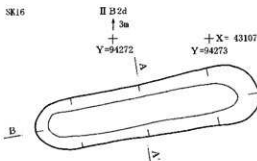


- SK15 A-A'
- 1 0V R2/3 黒褐色 シルト 跡まり中 黒色土粒 (径3mm) 1%含
 - 2 0V R4/4 褐色 粘土 跡まりやや所 黒色土ブロック (径3cm) 3%含
 - 3 0V R4/4 褐色 粘土 跡まりやや所 2層に跨るが、黒色土ブロックが多少の量で混入
 - 4 0V R2/3 黒褐色 シルト 跡まり中 灰層 (厚2mm) わずか
 - 5 0V R2/3 に向い黄褐色 砂 跡まりやや所 灰層土上ブロック (厚1cm) 1%含
 - 6 0V R3/4 暗褐色 シルト 跡まり中 灰層土上ブロック (厚2~3cm) 1%含
 - 7 0V R2/6 黄褐色 砂 跡まり中 花崗岩粒 (径3~4mm) 1%含

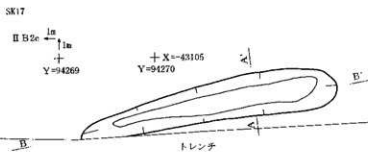
X=43112 | Ⅱ B 4d
Y=94272



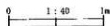
SK15 B-B'
1 0V R3/4 暗褐色 粘土質シルト 跡まり中 黒褐色土30%含



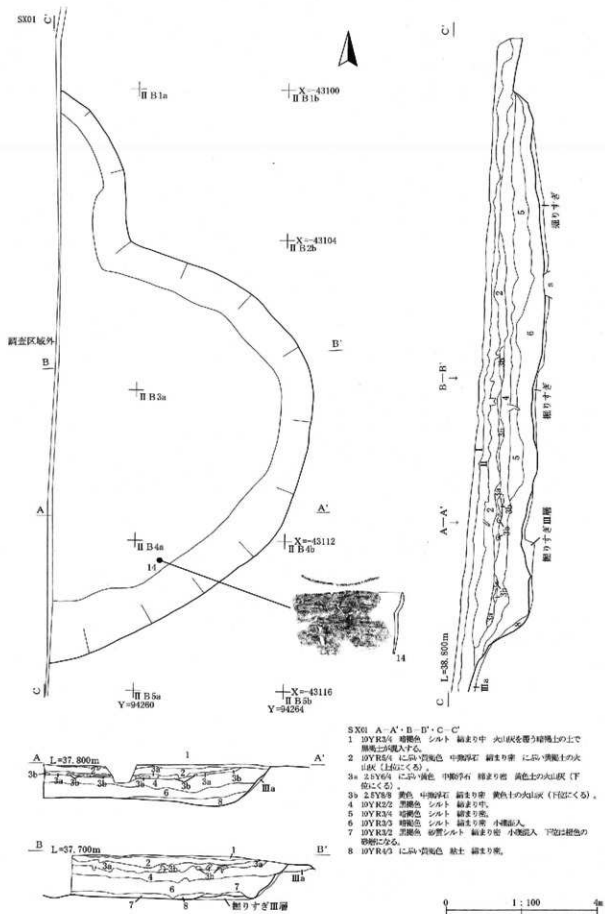
- SK16 A-A'
- 1 0V R2/2 黒褐色 シルト 跡まり中 花崗岩粒 (径3mm) 1%含
 - 2 0V R2/2 黒褐色 シルト 跡まり中 花崗岩粒 (径2~5mm) 7%含



- SK17 A-A'
- 1 0V R2/3 黒褐色 シルト 跡まりやや所 灰土した土塊や砂ブロック (径1cm) 1%含
 - 2 0V R2/3 黒褐色 シルト 跡まり中 花崗岩粒 (径2~3mm) 3%含
 - 3 0V R3/4 暗褐色 シルト 跡まり中 花崗岩粒 (径3cm) 1%含



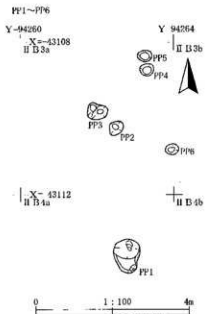
第13図 SK15~17陥し穴状遺構



- SX01 A-A'・B-B'・C-C'
- 1 DYK3/4 暗褐色 シルト 縮まり中 大石を露す砂礫の上で 礫質土が混入する。
 - 2 DYK5/6 濃い黄褐色 中礫浮石 縮まり中 濃い黄褐色の大 山灰 (上段にくる)。
 - 3a 2DYK4 濃い黄色 中礫浮石 縮まり中 黄色土の大山灰 (下 段にくる)。
 - 3b 2DYK9 黄色 中礫浮石 縮まり中 黄色土の大山灰 (下段にくる)。
 - 4 DYK2/2 濃褐色 シルト 縮まり中。
 - 5 DYK3/4 暗褐色 シルト 縮まり中。
 - 6 DYK2/3 暗褐色 シルト 縮まり中 小礫混入。
 - 7 DYK3/2 濃褐色 砂質シルト 縮まり中 小礫混入。下部は褐色の 砂礫になる。
 - 8 DYK4/3 濃い黄褐色 粘土 縮まり中。

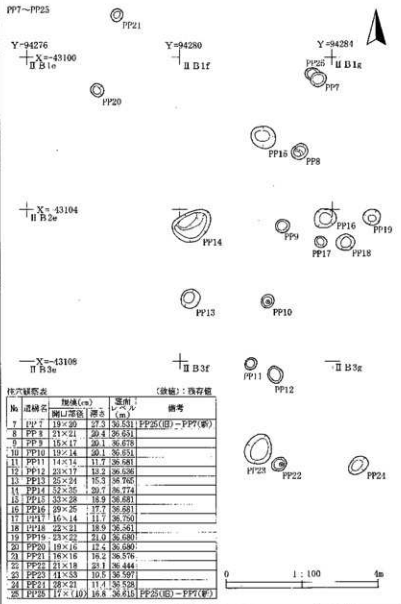
第14図 SX01落ち込み

I 検出遺構



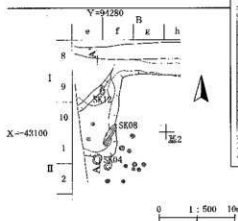
柱穴調査表 (数値)：残存壁

No.	遺構名	壁幅(m)	壁厚(m)	埋深(m)	備考
1	PP1	48×36	10.3	37.096	
2	PP2	21×18	10.3	37.586	
3	PP3	26×20	21.3	37.494	
4	PP4	19×16	16.2	37.174	
5	PP5	20×16	21.3	37.410	
6	PP6	16×14	22.8	37.630	



柱穴調査表 (数値)：残存壁

No.	遺構名	壁幅(m)	壁厚(m)	埋深(m)	備考
7	PP7	19×20	27.5	36.531	PP25(II)-PP7(新)
8	PP8	21×21	20.4	36.654	
9	PP9	15×17	20.1	36.475	
10	PP10	19×14	20.1	36.651	
11	PP11	14×14	11.7	36.681	
12	PP12	20×17	15.2	36.626	
13	PP13	20×24	15.3	36.765	
14	PP14	52×35	20.7	36.774	
15	PP15	33×28	18.9	36.681	
16	PP16	29×25	17.7	36.661	
17	PP17	16×14	11.7	36.750	
18	PP18	22×21	18.9	36.361	
19	PP19	23×22	21.0	36.680	
20	PP20	19×16	17.4	36.690	
21	PP21	16×16	16.2	36.576	
22	PP22	21×18	20.1	36.444	
23	PP23	41×33	10.5	36.597	
24	PP24	28×21	11.4	36.528	
25	PP25	17×107	16.8	36.616	PP25(旧)-PP7(新)



第15図 柱穴状土坑

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

平成19年度調査で出土した遺物は、縄文土器・石器・陶磁器・金属製品・銭貨・鉄滓類・炭化材である。出土量は大コンテナ1箱で、いずれも量は少ない。

(2) 縄文土器

土器は、小コンテナ1箱、総重量2905.7g出土している(第16図、写真図版12)。このうち16点を掲載した。出土地点をみると、尾根上のS I 01・02竪穴住居跡、S K 19土坑、北側谷部にあたる平坦面から出土している。時期をみると、尾根上の竪穴住居跡出土の1～3、土坑出土の6～9は、縄文時代中期後葉から末葉の時期と判断される。北側谷部では、縄文時代早期から前期の土器と中期の土器が出土している。南側にある尾根上からの流れ込みの可能性もあるが、より上流の西側の尾根部や谷部から下流に流れてきた可能性もある。

(3) 石器

7点、総重量381.4gが出土している(第17図、写真図版13)。内訳は、石鏃2点、石匙2点、削器1点、両極石器1点、磨製石斧1点である。全点掲載し、図化した。出土状況を見ると、S I 01竪穴住居跡から石匙1点、S I 02竪穴住居跡から両極石器1点が出土している。その他は1区北側の平坦面からの出土である。石材をみると、剥片石器類は、北上山地産の頁岩(中生代三疊紀～ジュラ紀)。磨製石斧は北上山地産(中生代白亜紀)の閃緑岩である。

なお、掲載した遺物のほかに剥片8点、総重量69.5gが出土している。すべて北上山地産の頁岩(中生代三疊紀～ジュラ紀)である。S I 02竪穴住居跡の炉の覆土から2点、他の6点は1区の平坦面から出土している。

(4) 陶磁器

陶磁器は3点、総重量18.0gが出土している(第17図、写真図版13)。いずれも破片である。全点掲載した。1区平坦面の北東側落ち込みから出土しており、平坦面から流れ込んだものと思われる。31は、陶器の小碗で19世紀頃、32は磁器の皿で18～19世紀ごろの肥前産の染付である。

(5) 金属製品

1点出土している(第17図、写真図版13)。No41は板状の製品で、尖る一端が折れ曲がっている。

(6) 銭貨

1点出土している(第17図、写真図版13)。No42は元祐通寶(俗称：叶手元祐)と推測される。

(7) 鉄滓類

1点(19.7g)出土している(写真図版13)。磁着するもので鍛冶滓と推測される。

(8) 炭化材

炭化材は8点で総量4.1gが出土した。いずれも遺構の覆土中から出土したもので微量である。肉眼による樹種鑑定では、ナラ(S I 01竪穴住居跡)・クリ(S K 11陥し穴状遺構、S K 19土坑、S X 01落ち込み)との鑑定結果を得ている。なお、出土した炭化材のうちS K 11陥し穴状遺構出土(試料No 802)、S K 19土坑出土(試料No 803)の2点の放射性炭素年代測定を行った(53頁)。

第8表 石器観察表

図録No.	発掘No.	図録No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考	石料名	産地等
						長さ	幅	厚さ				
17	13	31	1区 西 溝田河ちこみ	黒色土層中	石鏃	(2.4)	(1.7)	0.4	(1.2)	溝田穴溝	A	1
17	13	32	1区 北の字付岩		石鏃	(2.1)	1.3	0.4	(0.5)	向高野遺跡	A	1
17	13	33	5033		石鏃	4.8	3.6	0.9	27.4	不明、刃先：片削一面の加工	A	1
17	13	34	1区 北西側河面 土地区画	西土区層土 下位	石鏃	8.7	3.2	1.6	26.9	不明、刃先：両面全周加工	A	1
17	13	35	1区 北西側河面 土地区画	栗色土上	石鏃	4.4	3.0	0.9	7.7	刃先：片削一面の加工	A	1
17	13	26	5002		石鏃	3.1	2.4	0.7	9.2	2面一辺の割削	A	1
17	13	27	1区 西	栗色土層中	燧石片	(9.9)	5.6	3.2	(318.7)	刃先欠損	B	2

※石料略号 産地等略号一致

第9表 石材略号一覧表

略号	石材
A	白岩
B	燧石片

第10表 産地等略号一覧表

略号	産地等
1	北上川地 中生代C層紀
2	北上川地 中生代C層-シラカ

第11表 陶磁器観察表

(略記)：現在所

図録No.	発掘No.	図録No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	産地	時期	特徴
						器高	口径	底径				
17	13	31	1区 北東側ちこみ	黒色土中 Poc.1	小瓮	-	-	-	(1.6)	東武宮? 19c 研	陶器、灰味	
17	13	32	1区 北東側 溝田穴溝(現代)	北半硬土	鉢	-	-	-	(1.0)	不明	18~19c 研	磁器、染付
17	13	33	1区 北東側 溝田穴溝(現代)	1層 黒色土	楕円	-	-	-	(15.4)	不明	近世以降	陶器

第12表 金属製品観察表

(略記)：現在所

図録No.	発掘No.	図録No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	特徴	時期
						長さ	幅	厚さ			
17	13	41	T21	黒色土層	板状鉄製品	13.3	1.9	0.3	38.8	片刃、一端が折れ曲がる。	不明

第13表 銭貨観察表

(略記)：現在所

図録No.	発掘No.	図録No.	出土地点	層位	器種	計測値(mm)			重量(g)	特徴	時期
						外径	内径	厚さ			
17	13	42	1区PP? 高平屋上	元不産貨?	元不産貨?	(2.35×2.30)	(0.73×0.72)	(0.15)	(2.3)	縁欠損	近世前問?

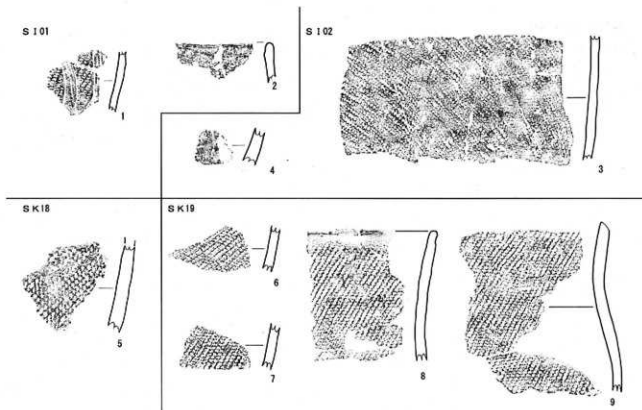
第14表 鉄滓類観察表

発掘No.	図録No.	出土地点	層位	産量(g)	器種	MOC規正			備考
						大	中	小	
13	51	トレンタ5	II層 層底土層	19.7	有	0	0	19.7	

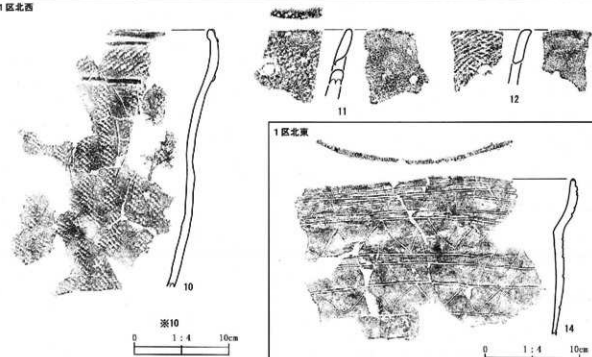
第15表 炭化材観察表

No.	発掘No.	出土地点	層位	層層名	重量(g)	備考
1	801	S10L-PP3	東半硬土	ナラ	0.1	
2	808	S10L-PP	南西層 軟土ラップル	ナラ	0.1	
3	802	SK11	IV下層上上位	クワ	0.4	CH分析試料
4	803	SK19	北半硬土1層	クワ、ナラ	2.2	CH分析試料
5	804	SK19	北半硬土5層	クワ	0.1	
6	805	SK19	南半硬土8層	クワ	1.1	
7	806	SK01	Poc.1	クワ	0.1	
8	807	1区 西トレンタ河側	落ち込みはじめ マサ上の土層	ナラ	1.7	
					合計	4.1

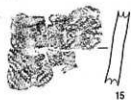
2 出土遺物



1区北西



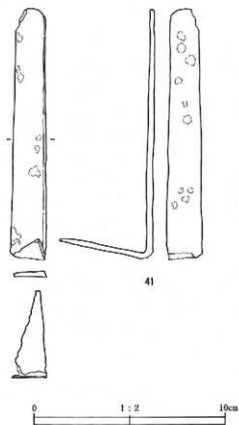
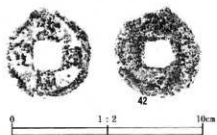
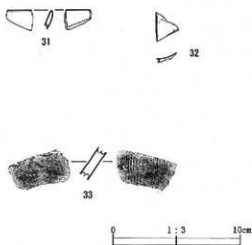
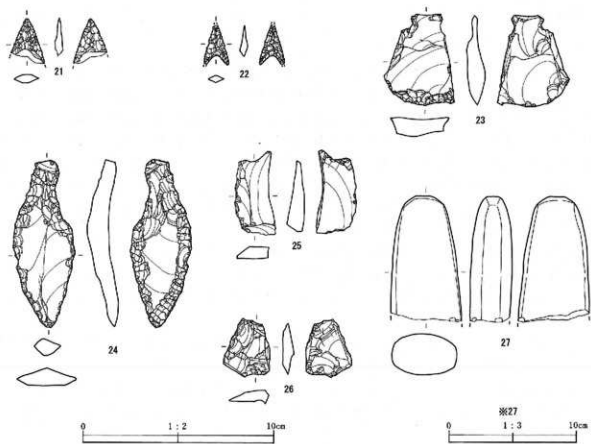
1区南西



1区西



第16図 土器



第17図 石器、陶磁器、金属製品、銭貨

3 まとめ

(1) 遺構

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡2棟、陥し穴状遺構9基、土坑10基、落ち込み1箇所、柱穴25個である。今回の調査区は、大きく南側の山地（尾根部）と北側の低地部（谷部）に大別される。南側の山地は、南側から続く尾根の北端にあたり、北側の低地は、現在調査区の北側で八木沢川に向かって東流する沢に沿って形成された低地である。検出された遺構の占地は、尾根部からは竪穴住居跡と大形土坑、低地部からは陥し穴状遺構、土坑・落ち込み・柱穴群が確認された。

竪穴住居跡と大形土坑は、ともに縄文時代中期に属すると考えられる。同時期の集落の尾根上への占地は、八木沢Ⅱ遺跡でも確認されている。尾根上ならどこでも良い沢ではなく、尾根の頂部から南斜面にかけて遺構がつけられていることに特徴がある（註1）。

落ち込みとした遺跡は、調査区域外の西側から伸びているものと推測されるが、現在、西側から八木沢川に向かって東流する小沢の旧河道で、埋没沢の可能性もある。覆土への火山灰の混入と出土遺物から、縄文時代には埋没したものと考えられる。土坑や陥し穴状遺構は、この沢の埋没後につけられているようである。

陥し穴状遺構は、溝状の形態をもつものが多いが、規則的な配列は見出し難い。ただし、現在北側を流れている小沢は、かつては南側から蛇行して流れていたようで、その流路に沿って、陥し穴状遺構が形成されていたようにも見受けられる。陥し穴状遺構は、この沢に向かって形成された獣道上につけられていたのだと推測される。柱穴群は近世以降のものである。対岸の北側の平坦面と併せて、八木沢川沿いの平坦面は、近世には居住域として使用された可能性がある。

(2) 遺物

縄文土器・石器・陶磁器・金属製品・銭貨・鉄滓類・炭化材が出土している。全体として量は少ない。縄文土器は竪穴住居跡や大形土坑に伴って、中期後葉から末葉の土器が出土している。石器は、竪穴住居跡から出土した石匙1点、S I 02竪穴住居跡から出土した両極石器1点が中期の石器と推測される。出土した陶磁器は、遺構に伴うものではなかったが、出土した銭貨とともに、当遺跡における近世以降の生活の痕跡を示す遺物である。鉄製品の所属時期の詳細は不明である。鍛冶滓が出土していることから、近接地で鍛冶関連の遺構が存在する可能性が高い。

炭化材は2点について放射性炭素年代測定を行った。縄文時代中期と推測されるS K 19土坑出土資料は4160±30yrBP、縄文時代と推測されるS K 11陥し穴状遺構出土資料は、5060±40yrBPとの鑑定結果を得ている。S K 09土坑覆土中に堆積していた火山灰は、十和出A火山灰との分析結果を得ており、中振火山灰と判断した現場での認識とは異なる結果となった。

(3) おわりに

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡や貯蔵穴、陥し穴状遺構などが、尾根部と低地部で占地を異にして確認された。同様の事例は他の遺跡でも確認されるが、今後は、周辺域とのより詳細な比較検討を行い、各時期における遺構の占地の傾向を明らかにしていくことが課題である。

註

- (1) (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2008『八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県第528集

V 平成20年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 検出遺構の概要

平成20年度調査で検出された遺構は、土坑1基である。遺構の占地をみると、東向きの斜面に立地している。尾根上では遺構が検出されなかったことから、遺構の密度が希薄な地域であると判断される。

調査区の微地形をみると、尾根部と谷部からなる。便宜的に中央尾根部、西谷部、東尾根部、東谷部①・東谷部②と区分した。尾根はやせ尾根であり、谷部は急峻である。併せて平成17年度の試掘調査の結果も参考にすると、今回の調査区の遺構・遺物の密度は低いと判断されたことから、全域で試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された地点において範囲を拡張して調査を行う方針で進めた。

設定したトレンチは37本（T101～137）である。平成17年度の試掘調査においても同地点に33本のトレンチが入れられ、遺構・遺物の確認が行われている。両者を合わせると、調査区全体の約5割の範囲について確認が行われている。

(2) 土 坑

東谷の斜面部で土坑1基が確認された。用途は不明である。

S K 20土坑

遺構（第19図、写真図版16）

[位置・検出状況] VIB 1 f グリッド。東斜面においてⅡ層で楕円形の広がりとして検出しており、陥し穴を想定して精査を進めたが、定型的な形状にならなかったことから、用途不明の土坑とした。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径190×110cm、底部径160×80cm、平面形は楕円形を呈する。深さは70cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅡ層を掘り込んでつくられている。底面は西から東に緩く傾斜している。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

1 検出遺構

第16表 トレンチ一覧表

No.	地区	検出面	遺構	遺物	備考
101	西谷部	V層	なし	なし	
102	西谷部	Ⅲ層下位	なし	なし	斜面下位でプラン状のもの検出し、断面でサブトレンチを設定したが遺構にはならなかった。
103	西谷部	Ⅲ層下位	なし	なし	
104	西谷部	Ⅲ～Ⅳ層	なし	なし	
105	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
106	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
107	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
108	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
109	西谷部	Ⅲ層～Ⅳ層	なし	縄文土器片（Ⅱ層黒色土下位市土）	サブトレンチ設定、基本土層②
110	西谷部	Ⅲ層下位?	なし	なし	
111	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
112	西谷部	Ⅲ層?	なし	なし	
113	中央尾根部	Ⅲ層	なし	なし	
114	東谷①	Ⅲ層	なし	なし	
115	東尾根部	Ⅲ～Ⅳ層	なし	なし	
116	東谷②	Ⅲ層	なし	なし	
117	東谷②	Ⅲ層	なし	なし	I・II層（黒色土・褐色土・暗褐色土）・Ⅲ層の堆積で、Ⅱ層暗褐色土中に中微礫石を確認。
118	東谷②	Ⅱ層	土坑1	なし	
119	中央尾根	Ⅳ層	なし	なし	
120	東谷①	Ⅲ層	なし	なし	サブトレンチ設定、基本土層③
121	東谷①	Ⅳ層	なし	なし	
122	東谷①	Ⅳ層	なし	なし	
123	東谷①	Ⅳ層	なし	なし	
124	東谷①	Ⅳ層	なし	なし	
125	東谷①	Ⅳ層	なし	なし	
126	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
127	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
128	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
129	中央尾根部	Ⅳ～Ⅴ層	なし	なし	
130	西谷部	Ⅳ～Ⅴ層	なし	なし	
131	中央尾根部	Ⅲ～Ⅳ層	なし	和服・鍔金具	サブトレンチ設定
132	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
133	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
134	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
135	中央尾根部	Ⅲ～Ⅳ層	なし	なし	
136	中央尾根部	Ⅳ層	なし	なし	
137	東尾根部	Ⅳ層	なし	なし	

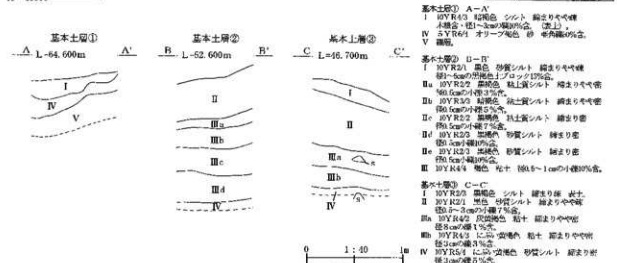
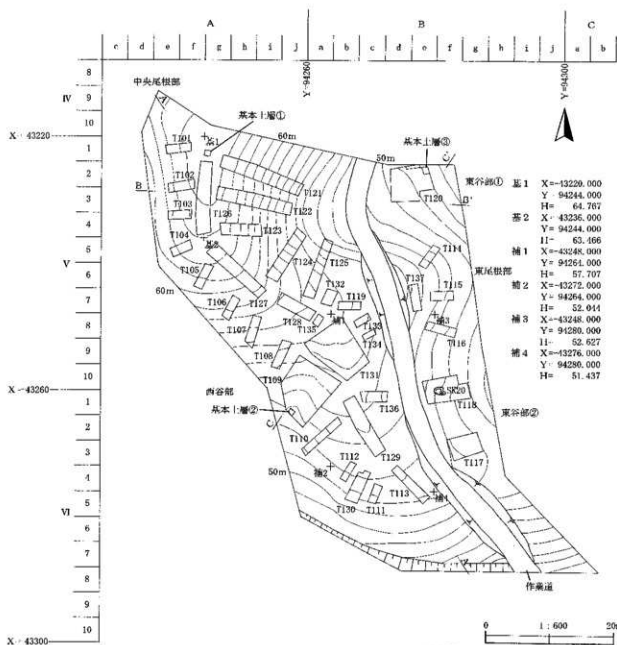
第17表 土坑観察表

(数値)：残存率

図面コード No.	通称名	位置	検出面	平面形	規模(m)		底面の レベル (m)	底土の堆積状況 (上位・下位)	底面開拓 (ⅡI→Ⅱ)	形状	付属施設	備考	時期	
					開口部	底面								
19	SK20	IVB1 I	Ⅲ	不整楕円形	190×110	160×80	70.0	48.600	黒土、黒褐色土	なし	上	なし	東側の底面に落ち込み有り	不明

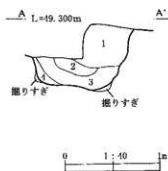
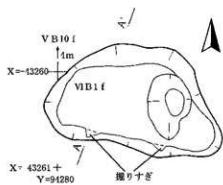
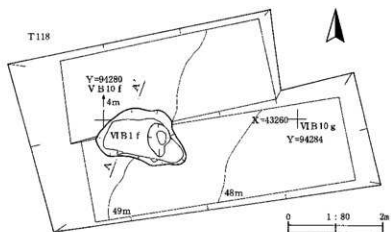
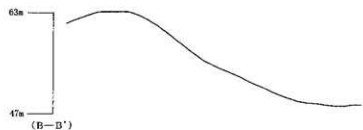
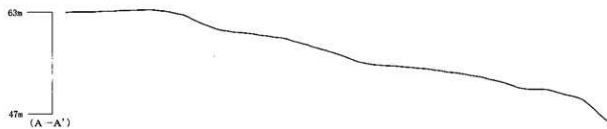
第18表 出土地点別土器重量表

No.	出土地点	層位	重量(g)
1	T109	Ⅲ層下位	129.8
2	T109	Ⅲ層暗褐色土	13.8
	小計		143.6



第18図 遺構配置図(1)

1 検出遺構



- SK20 A-A'
- 1 0Y R2/1 灰色 粘土質シルト 粘まりやや硬
層 1~3cm/層黄色粘土ブロック3%・径0.5cm
の小礫2%含ま
 - 2 0Y R2/1 灰色 粘土質シルト 粘まりやや硬
黒褐色粘土ブロック15%・径0.5~1cmの礫5%
含ま
 - 3 0Y R2/2 黒褐色 粘土 粘まりやや硬 褐色
粘土質シルト5%・径0.5~1cmの礫3%含ま

第19図 遺構配置図(2)、SK20土坑

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

平成20年度調査で出土した遺物は、縄文土器、金属製品、繊維質の遺物である。

(2) 縄文土器

縄文土器は、2袋(143.6g)出土した。トレンチ109試掘中の表土から出土したものである。1点を掲載した(第20図、写真図版17)。61は、底部から胴部が残る深鉢で、時期は中期頃と推定される。

(3) 金属製品

金属製品は2点出土している(第20図、写真図版17)。和鏡1点、飾金具1点である。トレンチ131の試掘の際、表土中から出土したものである。なお、重機で掘削作業を行い、掘削された表土中に遺物を確認したため、出土状況の写真記録などは無い。2点の出土地点は同じ地点である。また、出土地点及びその周辺において遺構は確認できていない。

和鏡

No.62は円形の和鏡である。文様から「草花飛鳥鏡」と命名される。円鏡で、直径9.0cm、縁高0.6cm、胎高0.1~0.2cm、重量89gである。この和鏡は次のような形態的特徴がある。縁が内傾式で細縁である。界圍は単圍で細線である。鈕座は菊花座で、先端が平坦に調整されておらず、丸い形状である。鏡胎は薄手である。縁と鈕座の特徴は、平泉出土の和鏡と異なる特徴である。また、小形のわりに重量感がある。当資料は、いわゆる藤原鏡の可能性もある。時期は12世紀中頃~後半と考えられる。

鏡の表面(鏡面)の一部には布日の痕跡が付いているが、出土した時点で繻物状の物質(No.64)が密着していた。整理時に鏡より取り外して、素材などの分析を行った。

なお、本資料は、両面の一部に緑青が確認できるが、全体として状態が極めて良好であるため質感を保って現状保存することとし、保存処理は行っていない。成分分析の結果は60頁を参照されたい。

飾金具

No.63は、飾金具で素材は銅製である。大鏡の鎖座金具で、総角付鎖座(あげまきつきかんど)と推測される。径6.9cm、厚さ0.1cm、重量22.4gである。左右上下の四方向が対称形で、四方にハート型の透しがある。中央に方形の穿があり、その周囲に直線的、また同心円状の擦痕が残る。小刻座と鎖が取り付けられていた痕跡と推測される。環座の線刻は肉厚的である。表面に鍍金されており、色調は、やや白みがかかる金色である。出土した時点で、裏面の一部に付着していた紙質の物質(No.65)は、整理時に取り外して素材の分析を行った。時期は平安時代後期(12世紀中頃)と考えられる。

なお、本資料は、出土した時点で地金が露出している部分があり、成分分析を行った後、できるだけ質感を損なわないように保存処理を行った。成分分析の結果は60頁を参照されたい。

(4) 繊維質の遺物

繻物状の物質

No.64は、和鏡(No.62)の鏡面の一部に密着していた、大きさ2cm四方余り、重量1g未満の繻物状の物質の一部である。分析の結果、漆が塗付された絹布であるとの鑑定結果を得ている(60頁)。

紙質状の物質

No.65は、飾金具(No.63)の裏面の一部に付着していた、大きさ2cm四方余り、重量1g未満の紙質状の物質の一部である。分析の結果、墨書が施された楮紙であるとの鑑定結果を得ている(60頁)。

3 ま と め

(1) 遺 構

平成20年度調査で検出された遺構は、斜面部で確認された土坑1基である。地形的にも遺構密度が高い個所ではないと判断される。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

(2) 遺 物

縄文土器1点、和鏡1点・飾金具1点が出土した。和鏡・飾金具とも遺構に伴うものではないが、いずれも形式的に12世紀に属する遺物と判断される。和鏡は「秋草飛鳥鏡」と命名されるものである。和鏡の形態的特徴は、これまで平泉遺跡群で出土した和鏡とは異なる部分がある。製作地の違いが反映されている可能性がある。平泉以外で出土している12世紀に属する和鏡も含めて、今後検討していく必要がある。飾金具は、大形の銀座金具で、総角付銀座（あげまきつきかんざ）と判断された。また、和鏡は漆が塗付された編物に包まれていた可能性があり、飾金具は、墨書が施された楮紙に包まれていた可能性がある。希少な出土事例であり、今回の出土状況の所以について引き続き検討していく必要がある。

(3) お わ り に

平成20年度調査の結果は、遺構・遺物ともに数量は少なかった。検出された遺構は、斜面部で確認された土坑1基であり、本来、地形的にも遺構密度が高い個所ではないと判断される。遺物としては、12世紀と判断される和鏡1点・飾金具1点が出土したことが特筆される。南側に隣接する八木沢野米遺跡第1次調査では、やはり明確な遺構に伴うものではないが、12世紀の白磁椀片が出土している（註1）。遺構は未確認ながら、八木沢地区において近接した地点で12世紀の遺物が相次いで出土したことは、12世紀の宮古地域において、確実に平泉藤原氏に関わる人々が活動していたことが推測される（註2）。今後の周辺地域の調査において、当該時期の遺構・遺物の確認に注意が必要である。

註

- (1) 岩文振第511集
 (2) 宮古市域の遺跡でも、磯崎館山・赤前I牛子沢・弘川I遺跡などの調査において、12世紀代と推測される厘美・常滑の壺・鉢型の遺物が出土している。『都市・平泉—成立とその構成—』P222~224。

参考文献

- 中野政樹 1969『和鏡』日本の美術42、至文堂
 京都国立博物館編集 1989『日本の甲冑』（株）大塚工務社
 久保智康 1999『中世・近世の鏡』日本の美術394、至文堂
 平泉町文化財センター 2000『鏡』『柳之御所資料館常設展示図録』
 久保智康 2002『飾金具』日本の美術437、至文堂
 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『平成17年度発掘調査報告書』岩文振第490集
 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『養の持II遺跡・養の持遺跡・下大谷地I遺跡・八木沢野米遺跡第1次発掘調査報告書』岩文振第511集
 相原康二 2009『岩手県内出土の鏡鑑類について』『紀要XVIII』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 山岸崇夫 1994『日本甲冑の実証的研究』日本甲冑の実証的研究刊行会
 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 2001『都市・平泉—成立とその構成—』



花枝双雀鏡 白山社遺跡 (平泉町) 直径11.8cm



松双鶴鏡 柳之御所遺跡 (平泉町) 直径11.5cm



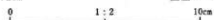
秋草双鳥鏡 柳之御所遺跡 (平泉町)
直径10.9cm



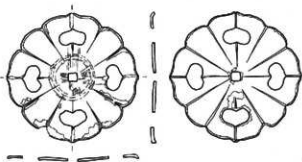
山水飛雁鏡 伽羅之御所遺跡 (平泉町)
直径10.2cm



草花飛鳥鏡 八木沢駒込II遺跡 (宮古市)
直径9.0cm



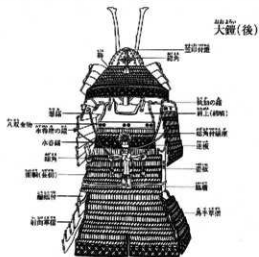
平泉遺跡群出土の和鏡と八木沢駒込II遺跡出土の和鏡



総角付鏡座 八木沢駒込II遺跡



飾金具と関連資料



京都国立博物館1989『日本の甲冑』より

第21図 和鏡、飾金具関連資料

VI 平成21年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 平成21年度調査区の概要

今回の調査区は遺跡のほぼ中央部分にあたる。その地形は遺跡の中でも最も高い山頂部、山頂より主に東側に広がる斜面部、さらにその下に広がる平坦面（低位面）からなる。この平坦面（低位面）は斜面部と八木沢川との間にあり、それほど広いものではない。調査区の現況は何れも杉林である。

山頂部からは土坑が1基検出されている。斜面部は中振火山灰が残っている場所があるなど、堆積土に後世の影響が少なく、遺構が良好な状態で残されていると期待されたが、今年度の斜面部の調査区内には遺構は見られなかった。低位面では遺物が出土するものの遺構はなく、八木沢川の旧河道であったことが分かった。

(2) 土 坑

1号土坑（第23図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 山頂部にあたる、A10gグリッドに位置し、地山面で検出した。

〔規模・形状〕 1.34×1.28mの不整な円形をしている。深さは33cmあり、底面からやや外傾して立ち上がり、2段底になっている。

〔埋土〕 地山ブロックを多量に含む黒褐色土や黒色土からなる。人為堆積である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物はなく、時期を特定する資料を欠く。

(3) 低 位 面

遺跡の東側にあたり、本遺跡の中では最も低い面になる。八木沢川と斜面部とに挟まれるようにあり、やや南北に細長い半円状の地形である。第22図にあるように要所にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認している。何れのトレンチからも遺構は確認できなかった。T8やT10では斜面部からの連続する地形がみられた。その他の場所ではT11やT12のように堆積土は砂と泥が交互に堆積するような水性堆積を中心としており、この平坦面は八木沢川によって運ばれた土砂と斜面部から流れ込んだ土砂によって構成されている。このことから低位面は八木沢川の旧河道であったと言えるが、具体的な時期については底面付近になると遺物が出土しなくなるため不明である。

2 出土遺物

67は縄文時代前期前葉頃の深鉢の破片である。非結束の草節による羽状縄文を地文とし、胎土には繊維を含んでいる。66は縄文時代後期以降の土器片と思われる。草節RLを地文としている。68は石鏃、69は磨製石斧である。

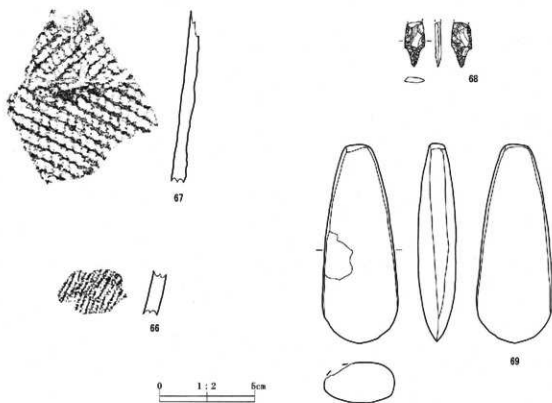
3 ま と め

本遺跡はこれまでの調査により遺跡の北側には縄文時代中期後葉から末葉の集落が広がっていることが明らかとなった。また遺跡の南側では中世初頭の和鏡が出土し、この時期の人々による何らかの活動があったことが想定された。今年度は遺跡の西端部から中央部、東端部までを調査したことに

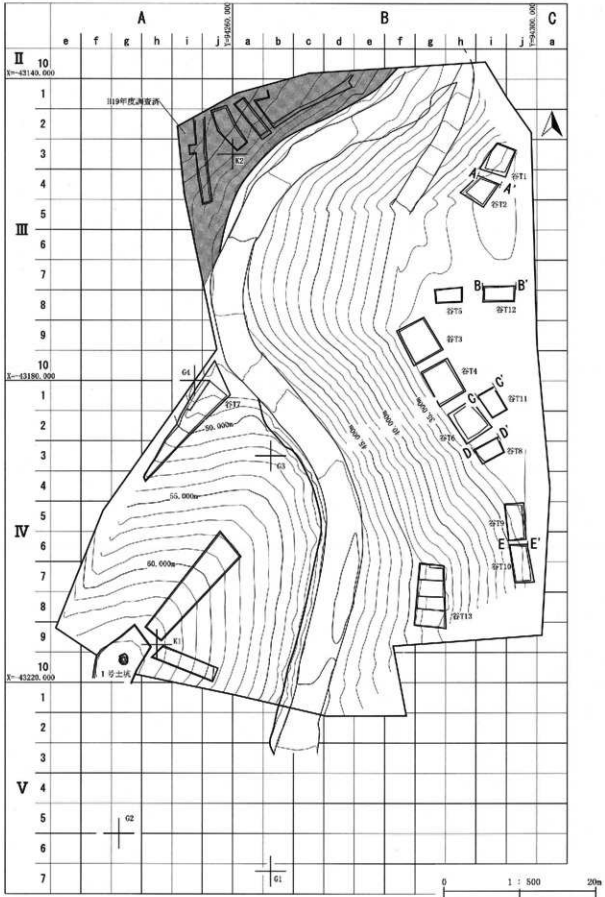
り、北側にある縄文時代の集落が展開してくるものと予想された。結果として遺構の広がり認められず、縄文時代の遺物が散布するに留まった。遺跡東端にあたる低位面には後晩期の遺構が認められるのではないかと予想していたが、八木沢川の旧河道が見つかり、遺構は確認できなかった。この八木沢の旧河道も基本的には遺物を殆ど含まず、いつ頃の河道であったのかは不明である。

山頂部では土坑が1基検出されている。出土遺物はない。前年度の第2次調査で12世紀代の和鏡と飾金具が南側の斜面から出土していたため、山頂部には経塚のような施設を想定していた。結果として、遺物を伴わない土坑が1基検出しただけであるが山頂部に土坑を掘る事例は縄文時代などには殆どなく、この遺跡の場合はやはり12世紀の和鏡・飾金具と関連付けて考えるのが最良であろう。根拠としては弱いが中世初頭に山頂部及びその周辺で和鏡や飾金具を用いた何らかの儀礼行為がなされ、1号土坑もその際に構築された施設の一部であったと考えたい。

隣接する八木沢野米遺跡からも12世紀代の白磁片が出土しており、この地域では中世初頭頃に何らかの営みがあったことは疑いない。

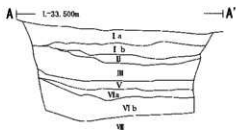


第22図 出土遺物

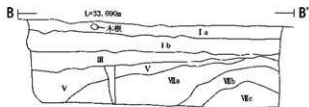


第23図 平成21年度調査区全図

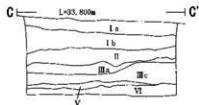
谷T2



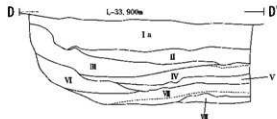
谷T12



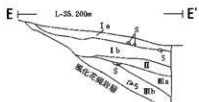
谷T11



谷T8

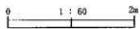


谷T10

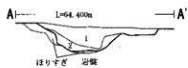
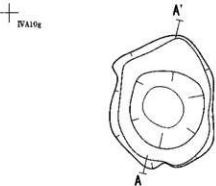


谷T2・8・10・11・12

- Ia 10YR2/3 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性・粘りやや有。
- Ib 10YR2/3 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性・粘りやや有。
- II 5YR5/6 赤褐色土 下部には濃い黄褐色砂 (粘砂) 粘性・粘りやや有。
- III 10YR2/2 黄褐色土 その下に10YR2/3黄褐色土 粘性・粘りやや有。
- IV 7YR5/2 マサ土多量を含む 粘りやや有。下部にはIIIa層に属する。
- IIIa 10YR2/2 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性・粘りやや有。
- IIIb 10YR2/2 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性・粘りやや有。
- IIIc 10YR2/2 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性・粘りやや有。
- IV 10YR2/2 黄褐色土 その下に10YR2/3黄褐色土 粘性・粘りやや有。
- V 10YR7/4 に近い黄褐色砂 粘性・粘りやや有。
- 10YR2/2 黄褐色土 マサ土多量を含む 粘性やや有 粘りやや有。
- VI 5Y2/2/2 a. 粘りやや有。
- VIa 2 5YR5/1 黄褐色土 粘りやや有。下部にはマサ土多量を含む。
- VIb 2 5YR5/1 黄褐色土 粘りやや有。下部にはマサ土多量を含む。
- VIc 5YR5/6 黄褐色土 下部には濃い黄褐色砂 粘性やや有 粘りやや有。
- VI 5Y2/2/2 a. 粘りやや有。
- VI 5Y2/2/2 a. 粘りやや有。
- VIa 5YR5/6 赤褐色土 下部には黄褐色砂 粘性なし 粘りやや有。
- VIb 10YR2/1 黄褐色土 下部には黄褐色砂 粘性なし 粘りやや有。砂と交互に堆積。
- VIc 5YR5/6 黄褐色土 下部には黄褐色砂 粘性なし 粘りやや有。
- W 5YR5/6 赤褐色土 風化花崗岩 粘性なし 粘りやや有。



1号土坑



- 1号土坑 (人魚塚)
- I 10YR2/1 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量を含む 粘性やや有。粘りやや有。
- II 10YR2/2 黄褐色土 埋山ブロック多量を含む 粘性やや有。粘りやや有。



第24図 トレンチ断面、土坑

Ⅶ 分析・鑑定

1 放射性炭素年代測定（平成19年度調査）

放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定） 八木沢駒込Ⅱ遺跡

（株）加速器分析研究所

（1）遺跡の位置

八木沢駒込Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込（北緯39° 36′、東経141° 55′）に所在する。

（2）測定の意義

遺構の年代を知る手掛かりとする。

（3）測定対象試料

測定対象試料は、SK11土坑の西半覆土上位から出土した木炭（802：IAAA-71936）とSK19土坑の北半覆土1層から出土した木炭（803：IAAA-71937）、合計点である。

（4）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシ

ユウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

（6）算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る ^{14}C 年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_S$ 。

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$ 。

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（欠石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ^{14}C 濃度（ $^{14}\text{A}_s$ ）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_s = ^{14}\text{A}_R \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_R \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_s \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその只と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{13}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算される。

$$\begin{aligned} T &= -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1] \\ &= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100) \end{aligned}$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal3.10校正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

SK11の木炭 (802 : IAAA-71936) の ^{14}C 年代が 5060 ± 40 yrBP、SK19の木炭 (803 : IAAA-71937) の ^{14}C 年代が 4160 ± 30 yrBPである。暦年校正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、802が3950~3790BC、803が2880~2840BC(11.5%)・2820~2740BC (35.4%)・2730~2670BC (21.3%)である。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素量も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

表1

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-71936	試料採取場所 : (宮古市) 八木沢駒込II遺跡 SK11 西半覆土上位 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : 802	Libby Age (yrBP) : $5,060 \pm 40$ $\delta^{14}\text{C}$ (‰)、(加速器) : -32.85 ± 0.85 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) : -467.4 ± 2.4 pMC (%) : 53.26 ± 0.24
	(参考) $\delta^{14}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) : -476.0 ± 2.1 pMC (%) : 52.40 ± 0.21 Age (yrBP) : $5,190 \pm 30$
IAAA-71937	試料採取場所 : (宮古市) 八木沢駒込II遺跡 SK19 北半覆土1層 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : 803	Libby Age (yrBP) : $4,160 \pm 30$ $\delta^{14}\text{C}$ (‰)、(加速器) : -26.26 ± 0.46 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) : -404.1 ± 2.3 pMC (%) : 59.56 ± 0.23
	(参考) $\delta^{14}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) : -405.9 ± 2.3 pMC (%) : 59.41 ± 0.23 Age (yrBP) : $4,180 \pm 30$

表2 参考資料：暦年校正用年代

IAA Code No	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71936	802	5060 ± 35
IAAA-71937	803	4162 ± 31

ここに記載する Libby Age(年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

2 火山灰分析（平成19年度調査）

八木沢駒込Ⅱ遺跡で検出された火山灰の分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県宮古市八木沢駒込Ⅱ遺跡は、宮古湾に注ぐ河川の一つである八木沢川上流域の右岸に位置する。今回の発掘調査では、縄文時代の土坑等の遺構が検出され、それらに伴う土器などの遺物が出土している。

今回の分析調査では、土坑の覆土中に認められた火山灰（テフラ）とされる堆積物について、その碎屑物の性状を明らかにし、テフラである場合には、既知のテフラとの対比を行い、各遺構の年代資料を作成する。

(1) 試料

試料は、SK09土坑の覆土の1層より採取された火山灰とされている堆積物（試料No.1）の1点である。試料の外観は、にぶい黄褐色を呈する砂質シルトである。発掘調査所見では、縄文時代前期の約6000年前（町田・新井,2003）に十和田カルデラより噴出した、十和田中振テフラ（To-Cu）に対比される可能性があると考えられている。

(2) 分析方法

ここでは、碎屑物全体の状況を捉えるためにテフラの検出同定分析を行い、その特性の一つとして重軽鉱物組成を求め、さらに火山ガラスが含まれている場合には、火山ガラスの屈折率の測定を行う。各分析の処理手順は以下の通りである。

1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

2) 重軽鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物および軽鉱物を偏光顕微鏡下にてそれぞれ250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落

射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。軽鉱物における「その他」も同様の粒子を指す。火山ガラスは、便宜上軽鉱物分に入れ、その形態分類は、上述のテフラ分析に準ずる。

3) 屈折率測定

屈折率の測定は、古澤 (1995) のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 結 果

1) テフラの検出同定

試料No.1には、中量の軽石と多量の火山ガラスが認められた。軽石は、最大径約0.8mm、白色を呈し、発泡やや不良なもの、白色を呈し、発泡のやや良好なものが混在する。火山ガラスは、ほとんどが無色透明の塊状の軽石型であるが、微量の無色透明のバブル型も認められた。

また、試料中には、軽石と径が同程度の灰黒色および赤褐色を呈する比較的新鮮な安山岩の岩石片が微量認められた。

2) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成では、斜方輝石と不透明鉱物が40%程度の割合で多く、これに約20%の単斜輝石が伴われる。軽鉱物組成では、風化変質粒である「その他」を除けば、軽石型火山ガラスと長石が同量程度で主体をなし、極めて微量の石英が含まれる。

3) 屈折率測定

結果を図2に示す。火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.505}$ - 1.510 のレンジに入り、 $n_{1.506}$ - 1.507 にモードがある。

(4) 考 察

今回の分析結果により、本試料は細粒の軽石と軽石型火山ガラスを主体とし、両輝石からなる重鉱物組成をもつテフラであると考えられる。上述した火山ガラスの形態の特徴および屈折率、さらに本遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、検出されたテフラは十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物に由来すると思われる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981)。前述したように、試料には細粒ではあるが軽石が多量含まれていたことから、本遺跡の位置する宮古市付近は、To-aが軽石質テフラとして分布する範囲に入っているといえる。また、町田ほか(1981)は、淡緑色・淡褐色を呈する $n_{1.502}$ 以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とするTo-aの上部火山灰層は南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしている。今回の試料では、屈折率測定結果から、低屈折率の火山ガラスは含まれていないことがわかる。なお、To-aの噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。

前述したように、発掘調査所見では、本試料はTo-Cuの可能性があるとされた。To-Cuも細粒の軽

石と軽石型火山ガラスを主体とし、重鉱物組成も輝石からなる。しかし、火山ガラスの屈折率は、町田・新井(2003)などの記載によれば $n_{1.510}$ - 1.514 (モード $n_{1.511}$ - 1.513)であり、To-aのそれとは明らかに異なるレンジを示す。したがって、今回の試料がTo-Cuに由来する可能性はほとんどないと言える。

ところで、今回の試料は土坑覆土中から採取されている。上記の通り分析結果からみて、純度の良好なTo-aの堆積物であると判断される。添付資料で詳細不明ではあるが、仮に上下の覆土に広く火山灰粒子が拡散していないとすれば、土坑の埋積途上でTo-aの噴出があり、土坑内にあった凹部に降下堆積したテフラ層であると推定される。この場合、この土坑はTo-aの噴出した10世紀には、すでに廃棄されてから時間が経過し、埋積が進行していた状態であったと考えられる。すなわち、土坑の構築年代は、To-aの降灰以前であるといえる。しかし、現時点では、To-a降灰以前のいつ頃かという時期については、推定のための指標は得られていない。土坑の時期特定には、今後の周辺域における類例の分析調査例の蓄積がのぞまれる。

引用文献

Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T., Yamagata, K. 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephtras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21, 223-250.

古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.

早川山紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—和国田澤と白頭山—火山, 43, 403-407.

町田 洋・新井房夫, 2003, 新編, 火山灰アトラス. 東京大学出版会 336p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—渡辺直経(編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865-928.

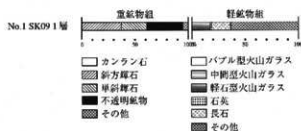


図1 重鉱物組成

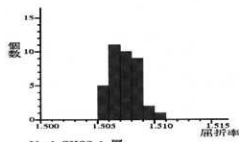
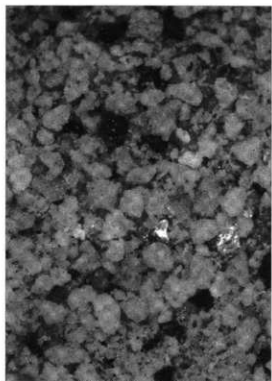


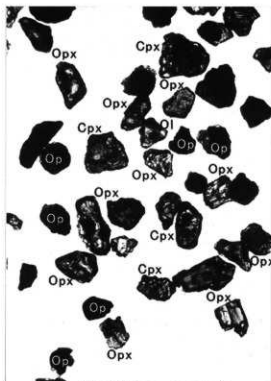
図2 火山ガラスの屈折率測定結果

表1 重鉱物分析結果

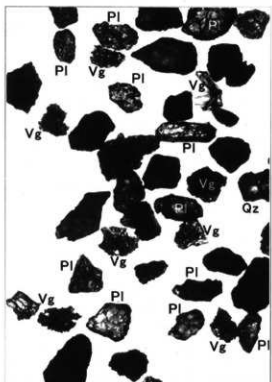
試料No.	遺構名	層位	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
1	SK09	1層	2	93	60	85	10	250	0	0	43	4	44	159	250



1. 軽石 (試料No.1 SK091層)



2. 軽石 (試料No.1 SK091層)



3. 軽鉱物 (試料No.1 SK091層)

Ol: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石,

Op: 不透明鉱物,

Vg: 火山ガラス, Qz: 石英, Pl: 斜長石,

1.0mm

0.5mm

1

2.3

3 金属製品・繊維質の遺物の成分分析（平成20年度調査）

八木沢駒込遺跡Ⅱ・出土和鏡・飾金具の分析

（財）元興寺文化財研究所

八木沢駒込Ⅱ遺跡出土の和鏡（草花飛鳥鏡）・飾金具（総角付銀座）、および、繊維状物質の成分分析について報告します。

（1）分析対象

八木沢駒込Ⅱ遺跡出土の和鏡・飾金具各1点、および、繊維状物質（それぞれに付着し別容器で保管されていたもの）

（2）分析内容

和鏡・飾金具を蛍光X線分析装置で成分分析し、繊維状物質を実体顕微鏡、生物顕微鏡観察によって同定した。

（3）使用機器と測定条件

- ▶ エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）【SIIナノテクノロジー SEA5230】
試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。
測定は大気中でφ1.8mmのコリメータを用い、45kVの管電圧で300秒間行った。この条件は大気中でカルシウム（Ca）より重い元素を検出できる。
なお、X線ターゲットはモリブデン（Mo）である。
また、定量はファンダメンタル・パラメータ法[※]により行った。
- ▶ 全反射フーリエ変換型赤外分光光度計（ATR-FTIR）【SensIR Technologies TravellR】
試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の屈折数の吸収を解析し、化合物を同定する。
全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。検出器DLATGSを用い、分解能4cm⁻¹で測定した。
- ▶ 生物顕微鏡【オリンパス BX50】
- ▶ 実体顕微鏡【ライカ MZ16・キーエンス VHX200】
- ▶ 赤外線撮影機器
カメラ：マミヤRZ67Pro、レンズ：マクロマミヤセコールZ 140mm F4.5
フィルター：フジIR-90、デジタルバック：コダックDCSプロバックPLUS
ストロボ：コメット：CB-24、画像処理：Photoshop ver.5.5（Mac OS 9.2.1）

※ ファンダメンタル・パラメータ法（FP法）

試料の構成元素とその組成からそれぞれの蛍光X線強度を理論的に知ることができることを利用して、未知試料の元素組成を推定する簡易定量法である。

(4) 結果と考察

1) 和鏡 (草花飛鳥鏡)

XRFによる分析箇所を図1に示した。その結果、図2~7に示すように鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)、鉛(Pb)を検出した。青銅鏡と考えられた。検出元素のうち、スズが地金に含有されているものか、スズ磨きなどで表面に付着したものかの判別はできなかった。

今回の分析は非破壊で得た表面情報であるため、資料内部の成分比とは異なると思われるが、これらの検出元素が和鏡にはほぼ一様に含まれるものと仮定してFP法により定量計算を行った(表1)。和鏡は概ね重量基準で、鉄0.3~0.4%、銅60~75%、ヒ素7~10%、銀0.2~0.3%、スズ20~30%、アンチモン0.1~2%、鉛1~2%を含む。和鏡の制作年代は12世紀と考えられ、その時代の青銅鏡として矛盾しない分析結果であった。

2000年度に分析した平泉町里遺跡出土の和鏡からは、今回分析した和鏡から検出したと同じ7種類の元素を検出した。そこで、両者を定量的に比較したいが、平泉町里遺跡出土の和鏡は劣化が進行し、その組成は当初の組成から大きく変化しているものと思われた。したがって、定量的には比較できないものと判断した。

表1 八木沢駒込II遺跡出土和鏡のXRF分析結果から
FP法により求めた成分の定量値(重量%)

元素 分析箇所	鉄 Fe-K α	銅 Cu-K α	ヒ素 As-K β	銀 Ag-K α	スズ Sn-K α	T/Pb Sb-K α	鉛 Pb-L β	合計
鏡背①	0.27	62.64	9.43	0.27	25.12	0.23	2.04	100
鏡背②	0.31	56.91	9.67	0.35	30.28	0.17	2.31	100
鏡背③	0.47	73.51	6.50	0.22	18.12	0.11	1.07	100
鏡面④	0.30	74.38	7.04	0.21	15.86	0.04	2.17	100
鏡面⑤	0.32	65.22	9.48	0.26	22.70	0.08	1.94	100
鏡面⑥	0.36	59.42	9.44	0.34	28.19	0.18	2.07	100

2) 飾金具 (総角付銀座)

XRFによる分析箇所を図8に示した。その結果、図9~13に示すように鉄、銅、ヒ素、銀、金(Au)、水銀(Hg)を検出した。

金色部分(分析箇所a)からは金を強く検出、剥がれた部分からは銅を検出し、金を検出できなかったことから、飾金具は金銅製品であった。金とともに水銀を検出したことから、鍍金されたものであると考えられた。

また、飾金具の制作年代(12世紀)と銀の検出強度から、銀は銅や金に含まれていたものであると思われた。

3) 和鏡付着繊維状物質

和鏡に付着していた繊維状物質(分析用細片試料、図14)を実体顕微鏡で観察した。観察面(図15)は繊維状物質(図16)と黒色膜(図17)に分離できた。繊維状物質は平織りで、織り密度(1cm²当

たりの経緯糸の本数は約50×40であった（経緯糸の区別ができなかったため、糸の数が多いうほうを経糸とした）。

採取した繊維状物質から黒色膜を分離し、それぞれの微量片をATR-FTIRで分析した。繊維状物質から1620、1510cm⁻¹に特徴的な絹の吸収（図18）を、黒色膜からは1650-1550、1380、1270cm⁻¹に特徴的な漆の吸収（図19）を得た。

さらに、別に採取した微量片をエポキシ樹脂で包埋後、ミクロトームを用いて光が透過する薄い塗膜断面の切片を作製した。切片作製時に繊維状物質と黒色膜が分離したため、それぞれ永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察を行った。繊維状物質にはやや丸みを帯びた三角形の網断面（図20）が見られ、黒色膜には約30μmの松煙や油煙等の煤を混ぜた黒色漆1層（図21）が観測された。

よって、和鏡に付着した本資料は、漆が塗布された絹布であると考えられた。

4) 飾金具付着繊維状物質

飾金具に付着していた繊維状物質（分析用細片試料、図22）を実体顕微鏡で観察した（図23）。明確な織りは観測されず、紙であると考えられた。微量片をエポキシ樹脂で包埋後、ミクロトームを用いて光が透過する薄い塗膜断面の切片を作製した。永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察を行った（図24）。繊維断面が楕円形でルーメンがみられることから大麻や苧麻、楮であることが考えられた。詳細な紙繊維の同定を高知県立紙産業技術センターに依頼した。劣化等により染色液による断定はできなかったが、繊維自体の凹凸により楮の可能性が高いとされた。

また、資料が紙である事や表面観察の結果、黒い線状のものは墨書と考えられた。そこで、赤外線写真を撮影した（図25）。

（文責 川本耕三・山田卓司）

(5) 分析データ

1) 和鏡 (草花飛鳥鏡)



図1 八木沢駒込Ⅱ遺跡出土 和鏡(草花飛鳥鏡)の分析箇所

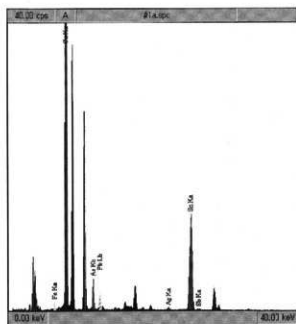


図2 和鏡 分析箇所①のXRFスペクトル

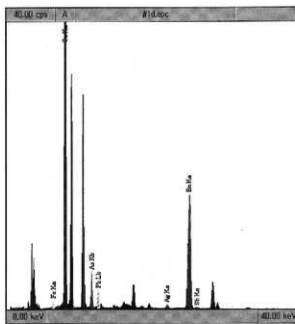


図3 和鏡 分析箇所②のXRFスペクトル

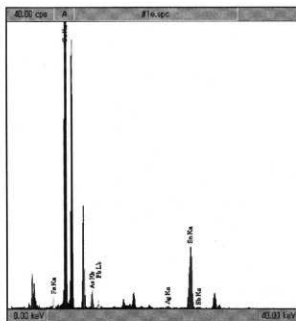


図4 和鏡 分析箇所③のXRFスペクトル

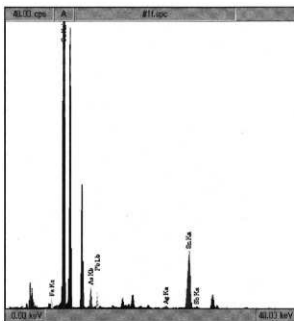


図5 和鏡 分析箇所④のXRFスペクトル

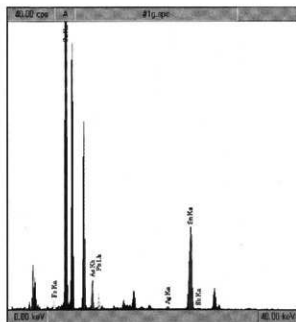


図6 和鏡 分析箇所⑤のXRFスペクトル

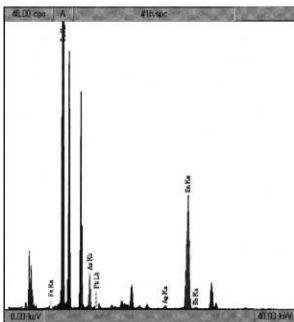


図7 和鏡 分析箇所⑥のXRFスペクトル

2) 飾金具 (総角付銀座)

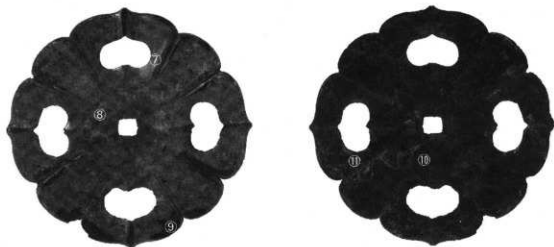


図8 八木沢駒込Ⅱ遺跡出土 飾金具 (総角付銀座) の分析箇所

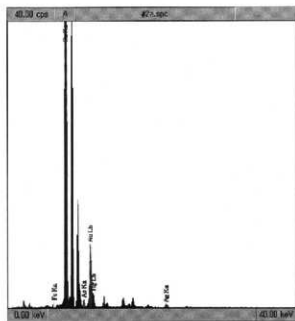


図9 飾金具 分析箇所⑦のXRFスペクトル

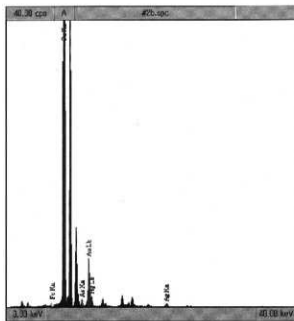


図10 飾金具 分析箇所⑩のXRFスペクトル

3 金属製品・繊維質の遺物の成分分析（平成20年度調査）

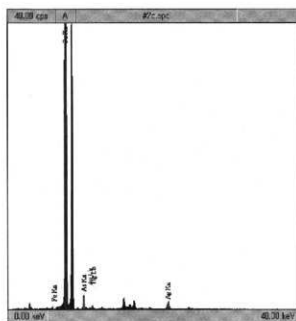


図 11 鋤金具 分析箇所⑨のXRFスペクトル

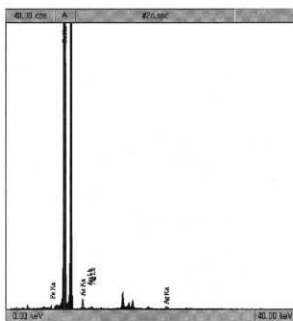


図 12 鋤金具 分析箇所⑩のXRFスペクトル

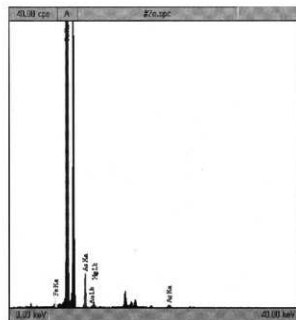


図 13 鋤金具 分析箇所⑪のXRFスペクトル

3) 和鏡付着繊維状物質

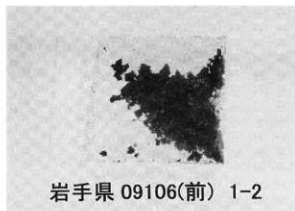


図 14 和鏡付着繊維状物質 (細片)

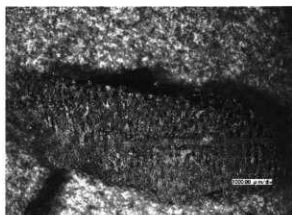


図 15 和鏡付着繊維状物質の実体顕微鏡像

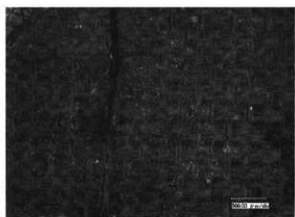


図 16 繊維状物質の実体顕微鏡像

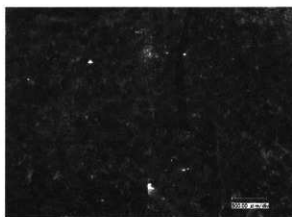


図 17 黒色膜の実体顕微鏡像

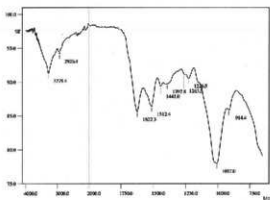


図 18 繊維状物質のATR-FTIR

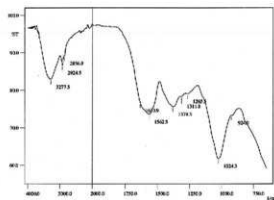


図 19 黒色膜のATR-FTIR

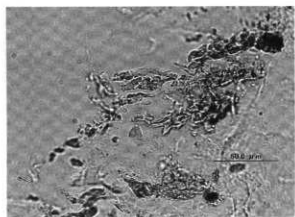


図20 繊維状物質の断面写真

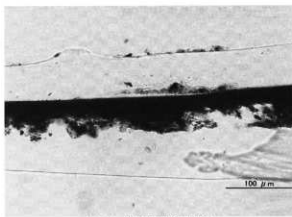


図21 黒色膜の断面写真

4) 飾金具付着繊維状物質

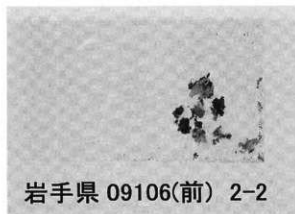


図22 飾金具付着繊維状物質（細片）

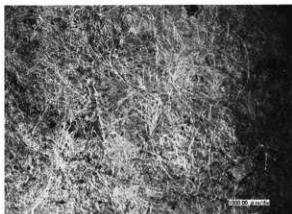


図23 飾金具付着繊維状物質の实体顕微鏡像

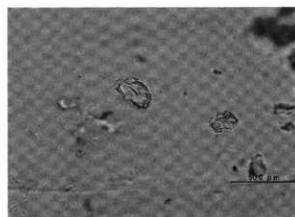


図24 繊維状物質の断面写真

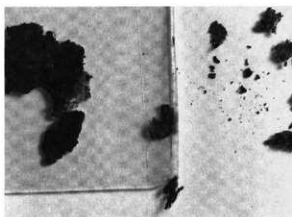


図25 飾り金具付着繊維状物質の赤外線写真

写 真 图 版



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）

写真図版1 調査区全景



調査前の様子（北から）



調査後の様子（北から）

写真図版 2 調査区の様子



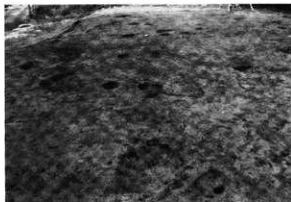
1区基本土層①断面（東から）



2区基本土層②断面（東から）



1区柱穴状土坑平面（南から）



1区柱穴状土坑平面（南から）



トレンチ1・2平面（北から）



トレンチ6・7平面（東から）

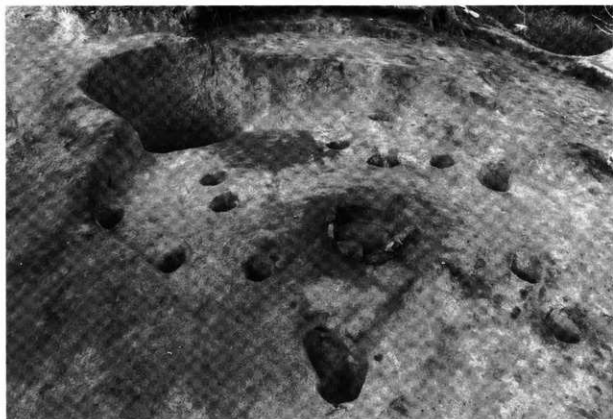


1区北西側落ち込み断面（西から）



1区北東側落ち込み断面（東から）

写真図版3 基本土層、トレンチ



平面（南から）



断面A-A'（南から）



断面B-B'（東から）



炉平面（東から）



炉断面C-C'②（東から）

写真図版4 SI01竪穴住居跡



平面（南東から）



断面A-A'（南から）



断面B-B'（東から）

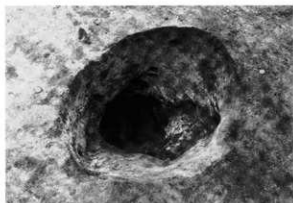


炉平面（東から）



炉断面D-D'②（東から）

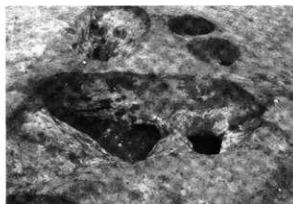
写真図版5 SI02竪穴住居跡



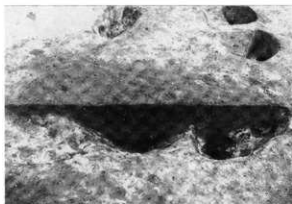
SK01平面 (東から)



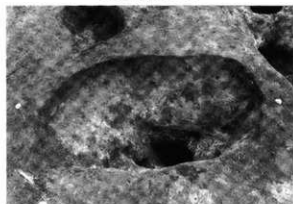
SK01断面 (西から)



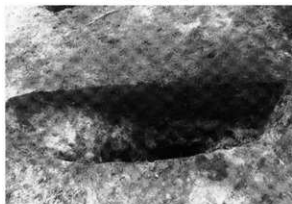
SK02平面 (東から)



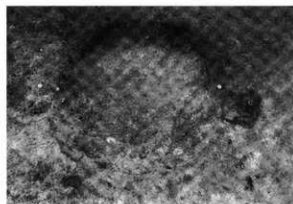
SK02断面 (南から)



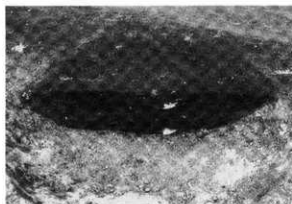
SK03平面 (東から)



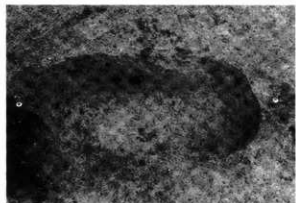
SK03断面 (西から)



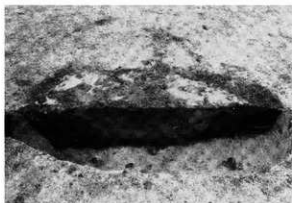
SK04平面 (南から)



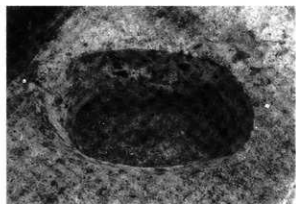
SK04断面 (南から)



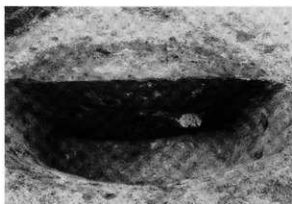
SK09平面 (南から)



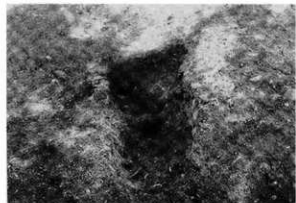
SK09断面 (南から)



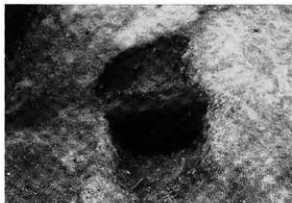
SK10平面 (南から)



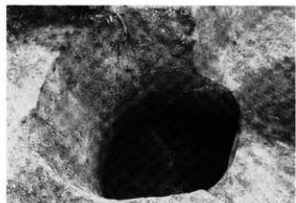
SK10断面 (南から)



SK12平面 (南から)



SK12断面 (南から)



SK14平面 (南から)



SK14断面 (南から)

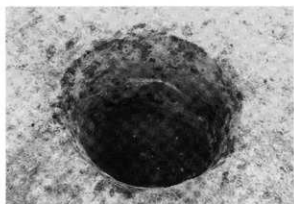
写真図版7 SK09・10・12・14 (1) 土坑



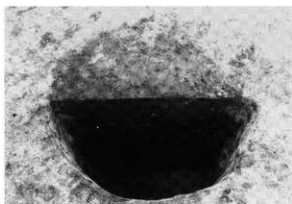
SK14・19平面 (西から)



作業風景



SK18平面 (南から)



SK18断面 (南から)



SK19平面 (南から)



SK19断面 (南から)



SK19遺物出土状況 (南から)



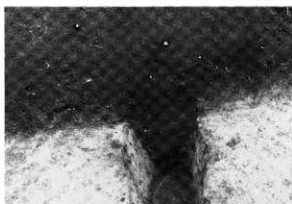
SK05平面 (西から)



SK05断面 (南から)



SK06平面 (東から)



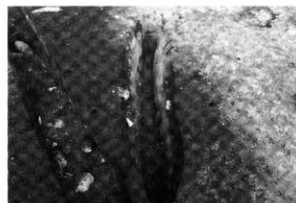
SK06断面 (東から)



SK07平面 (南から)



SK07断面 (西から)



SK08平面 (南から)

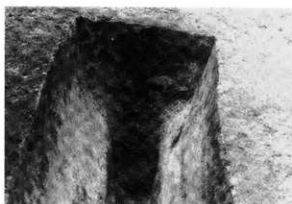


SK08断面 (南から)

写真図版9 SK05~08陥し穴状遺構



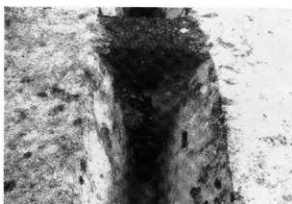
SK11平面 (西から)



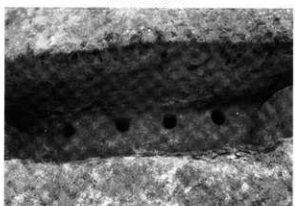
SK11断面 (西から)



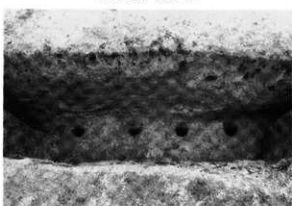
SK13平面 (東から)



SK13断面 (東から)



SK13副穴平面 (南から)



SK13副穴断面 (南から)



SK15平面 (北から)

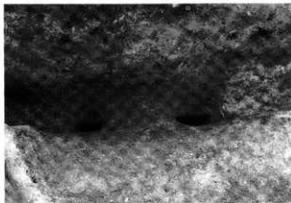


SK15断面 (南から)

写真図版10 SK11・13・15(1) 陥し穴状遺構



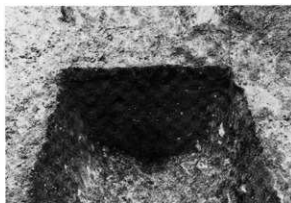
SK15副穴平面 (東から)



SK15副穴断面 (東から)



SK16平面 (西から)



SK16断面 (西から)



SK17平面 (東から)



SK17断面 (東から)

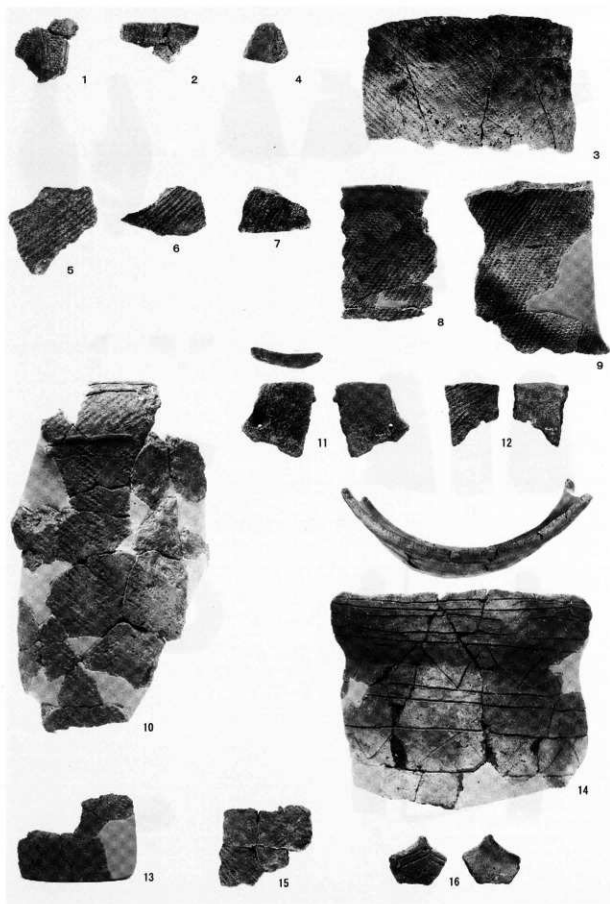


SX01平面 (東から)

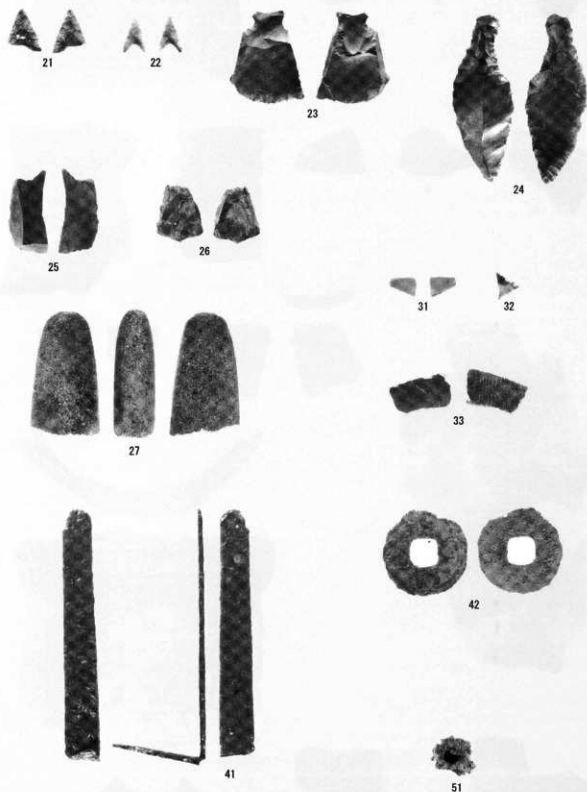


SX01断面 (南から)

写真図版11 SK15 (2)・16・17陥し穴状遺構、SX01落ち込み



写真図版12 土器



写真図版13 石器、陶磁器、金属製品、鉄沖類



遺跡遠景（南西から）



調査区全景（南から）

写真図版14 調査区全景（1）



調査区全景 (西から)



調査区調査前現況 (南から)



調査区調査終了後 (南から)



尾根部調査前現況 (北から)



尾根部調査終了後 (北から)

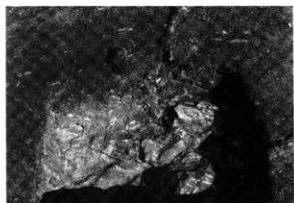
写真図版15 調査区全景 (2)、調査前現況 (1)



東谷①調査前現況（南から）



東谷①調査終了後（東から）



VAグリッド尾根基本土層①断面（南西から）



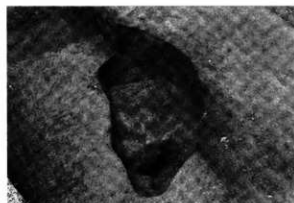
西谷（T109）基本土層②断面（東から）



T109平面（東から）



T119断面（東から）

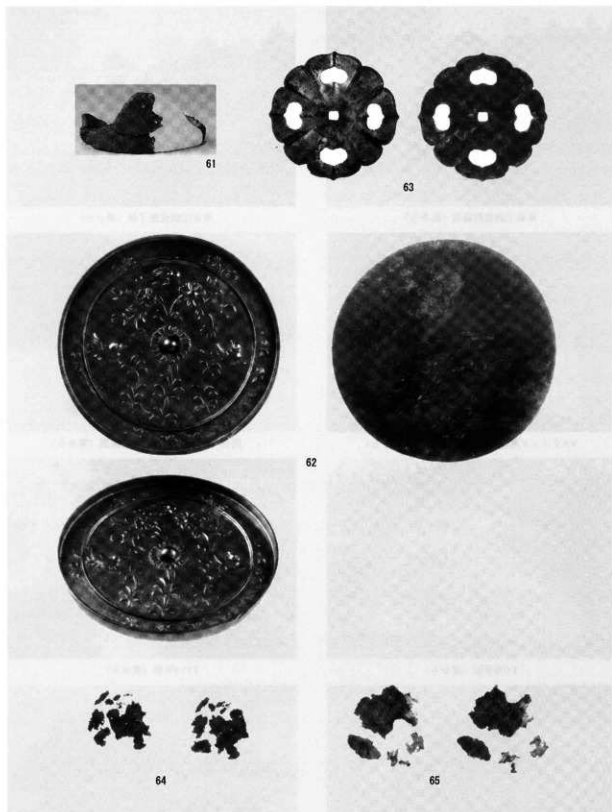


SK20平面（南東から）



SK20断面（東から）

写真図版16 調査前現況（2）、基本土層、SK20土坑



第21表 繊維質の遺物観察表

〔単位〕：保存数

図版 No	写真 No	掲載 No	出土地点	層位	器種	計測値			重量(g)	素材	特徴	時期
						長さ	幅	厚さ				
17	64	トシナ151	1: 漆表土	銅物	-	-	-	-	帆布	銅板No.62図の裏面に付着、分析試料#01	12世紀	
17	65	トシナ131	1: 漆表土	紙物	-	-	-	-	楮紙	銅板No.62図金具の裏面に付着、分析試料#02	12世紀	

写真図版17 土器、金属製品、繊維質の物質



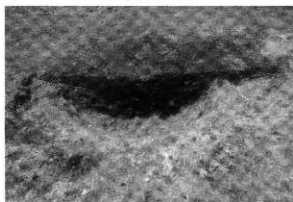
遺跡近景 (南から)



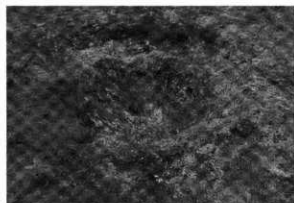
遺跡近景 (東から)



山頂部平面 (東から)



土坑平面 (南から)



土坑平面 (南から)



斜面部調査状況 (南から)

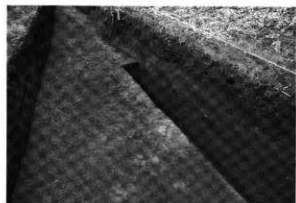


斜面部中央の検出面 (北東から)



斜面部調査状況 (東から)

写真図版18 山頂部、斜面部



斜面部中覆面の上下で〔南から〕



谷部はトレンチ調査を行った〔北から〕



谷T2〔南から〕



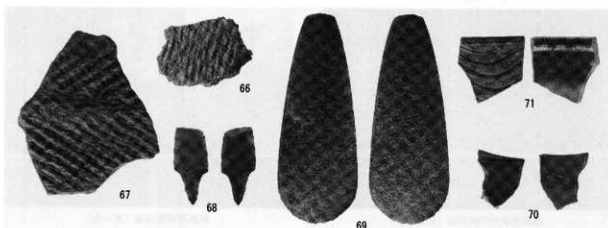
谷T13〔北から〕



谷T18〔北から〕



谷T11〔南から〕



写真図版19 谷部ほか、出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やぎさわこまごめ2いせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	八木沢駒込Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第575集							
編著者名	阿部聡則・杉沢昭太郎・八重畑ちか子・菅野 梢							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 Ⅱ (019) 638-9001							
発行年月日	2011年 2月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村	北緯 東経 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
八木沢駒込Ⅱ遺跡	岩手県宮古市大 字八木沢第8地 割字駒込40ほか	03202	1G43-1244	39度 36分 25秒	141度 55分 54秒	(平成19年度) 2007.10.30～ 2007.12.05 (平成20年度) 2008.11.04～ 2008.11.27 (平成21年度) 2009.05.25～ 2009.07.03	1,900㎡ 2,800㎡ 3,600㎡	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八木沢駒込Ⅱ遺跡 (平成19年度)	集落	縄文時代 中期ほか	竪穴住居跡2棟 土坑10基 陥し穴状遺構9基 柱穴25個	縄文土器、石器、 陶磁器、金属製品、 銭貨、鉄滓				
八木沢駒込Ⅱ遺跡 (平成20年度)			土坑1基	銅鏡 飾金具	12世紀の銅鏡、飾金具			
八木沢駒込Ⅱ遺跡 (平成21年度)			土坑1基	縄文土器・石器				
要約	遺跡は八木沢川中流域西岸にあり、山地からのびる尾根と尾根下に形成された低地からなる。尾根部には縄文時代中期と見られる竪穴住居跡や土坑が検出され、集落として利用されていたことが明らかになった。低地部には陥し穴状遺構があり縄文時代には狩猟の場となっていたようである。南側の尾根では12世紀後半頃の銅鏡や飾金具が出土しており、平泉藤原氏に関わる人々がこの地で活動していたことが推測される。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集

八木沢駒込Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成23年2月18日

発行 平成23年2月23日

編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193) 71-1716

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 有限会社 博光出版
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号
電話 (019) 641-0671

